国土審議会北海道開発分科会
第４回基本政策部会議事録

平成１８年3月２４日

国土審議会北海道開発分科会第４回基本政策部会議事次第

日時：平成１８年3月２４日(金)
１３：３０～１６：００
場所：中央合同庁舎２号館低層棟
共用会議室２Ａ・２Ｂ

１．開会

２．議事
（１）時代の潮流の変化と北海道開発の意義について

（２）その他

３．閉会

（配付資料）

資料１	国土審議会北海道開発分科会基本政策部会委員名簿
資料２	国家的課題に関する整理
資料３	基本政策部会における意見から導き出される時代の潮流の変化と新たな計画の在り方に関する視点・論点
資料４－１	時代の潮流の変化と北海道開発の意義
資料４－２	時代の潮流の変化と新たな計画の在り方の視点・論点
資料５	中間とりまとめに向けた各委員の意見のとりまとめについて(案)
参考資料１	第４回基本政策部会事前配付資料についての意見（濱田委員）
参考資料２	国土審議会北海道開発分科会の調査審議事項等について
参考資料３	調査・審議にあたっての視点・論点

国土審議会北海道開発分科会第４回基本政策部会

平成１８年３月２４日（金）

【岡田総務課長】　それでは定刻でございますので、ちょっと２人ほどおくれておられる方がありますけれども、ただいまから北海道開発分科会第４回基本政策部会を開会いたします。

本日は、皆様、お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。本日は１０名の御出席をいただく予定になってございます。それから、加藤委員の所属される札幌市からは、秋元市民まちづくり局企画部長、山本委員が所属する北海道庁からは稲垣東京事務所長にご出席いただいております。北海道局長は国会に呼ばれておりまして、後ほどおくれて出席させていただきます。

以降の進行につきましては、部会長、よろしくお願いいたします。

【南山部会長】　皆様、本日は大変お忙しいところを御出席をいただきましてありがとうございます。

早速、議事に入りたいと思います。

今日の議題は、お手元に資料をお配りしてございます「時代の潮流の変化と北海道開発の意義について」というところがメインテーマであります。今回の資料は、これまでいろいろ部会でご議論いただきました中身を踏まえまして、我が国の課題、新たな計画の在り方、こういうことに関する具体的な検討項目について整理したものをお手元に置いております。特に今回のメインの資料といいますか、資料４－１「時代の潮流の変化と北海道開発の意義」について、これは計画の在り方を検討するに当たりましてのいろいろな問題意識を集約・整理したものであります。今日の部会では、この点について、今後こういう論点のもとで進めていくのがよいかどうかということも含めまして皆さんから御意見をいただきたい、御議論いただきたいと考えております。

それでは、事務局から、資料２以下、資料４－２まで一括して説明をさせていただきまして、その後、議論を行いたいと思います。ではどうぞ。

【鈴木参事官】　北海道局参事官の鈴木です。よろしくお願いいたします。早速、資料の説明に入らせていただきたいと思います。座って説明させていただきます。

まず、資料２を見ていただきたいと思います。

資料２は、この時代の潮流等を見るに当たりまして、国家的課題についてどのような整理がされているかということを整理したものです。

資料２の左側のほうにあります「企画調査部会報告」、これは平成１５年に企画調査部会報告をいただいたわけですが、そのときに国家的課題は７つありまして、左側に示してある部分です。その７つのうち、４つの部分について北海道開発としてこの課題解決に貢献していくのだというような位置づけでした。それに対しまして、真ん中の欄と右側の欄につきましては、２００５年の「骨太方針」あるいは「２１世紀ビジョン」の中から、今考えられている国家的課題を抽出したものです。

まず１つは「新しい躍動の時代を実現するための取組」ということで、「国民の安全・安心の確保」が大きく１つくくり出されております。

それからもう一つは、やはり時代的に人口減少社会が到来したということから、次世代の育成、あるいは人間力の強化、右側がその内容ですけれども、人口減少・少子高齢化の中で豊かな暮らしの世界にとってのモデルとなること、というようなことが国家的課題として挙げられております。

「グローバル戦略の強化」の中では、「世界に通用する強い地域の形成」、右側には労働生産性上昇、観光戦略強化などがあります。

「強い農林水産業の育成」ということで、特に「農林水産物の輸出拡大に向けた取組の促進」が課題として挙げられております。

その次のページ。企画調査部会の時点では「環境を重視した循環型経済社会の構築」という課題であったわけですが、さらに進みまして「地球環境問題への取組強化」、右側では、「循環型社会の構築と環境・エネルギー問題への総合的対処」が課題として挙げられております。それから、「財政構造改革の強力な推進」というのも課題として挙がっております。

その次の二重丸「民間主導の経済活動を確実なものにするために」ということで、民需主導がうたわれております。

「『小さくて効率的な政府』のための３つの変革」では、資金の流れ、仕事の流れ、人と組織を変えるというようなことがうたわれておりまして、その中で「官から民へ」、あるいは「国から地方へ」、その中で道州制等の項目が盛り込まれているということで、国家的課題というのがこのように今、変化してきているというような状況になっております。

次に、資料３です。これは、これまでの基本政策部会の中で議論していただいたことか

ら、「時代の潮流の変化と新たな計画の在り方に関する視点・論点」として事務局としてまとめたものです。

１つ目が「２１世紀の我が国における北海道の特性について」ということで、いろいろな意見をいただいているわけですけれども、それらを事務局としてはこういう見方ができる、あるいはこういうふうに整理していきたいというようなことで、四角の中で、これは地理的な特性ですが、「冷涼な気候を有し、東アジアとロシア極東地域との接点に国土の２２％を占めて位置する北海道は、我が国の経済社会に、フロンティアとしての可能性と同時に、他とは異なる地としての多様性と役割を与えている」という見方であります。

その次の四角、これは北海道の自然特性ですけれども、北海道については、広域分散型でありますが、「グローバルな視野から見ても、良好な人的な資源と社会基盤」と、さらに「豊富で厳しくもある自然資源」、これらが密接に共存し、個性豊かな地域を形成している地域である。

その次の点、２ページ目のほうへ行きまして、それでは、北海道ではどういうようなことをしていくのかということで、四角の中ですが、「２１世紀において、我が国の持続的な成長の姿を展望するにあたり、北海道が有する貴重な価値・資源である地域の優位性を更に活かしていくことが、我が国への貢献につながる」というような位置づけを持つのだと整理しまして、これが言いたい部分です。

２つ目、今度は２１世紀を展望した我が国の直面する課題、我が国全体の課題についても議論されておりますが、「２１世紀の我が国は、持続的・安定的な成長に向けて、人口減少・少子高齢化とグローバル化という極めて重要な環境の変化の中、人の力を高め、グローバリズムに対応しうる民の活力・地域の競争力の育成が急務となっているのではないか」。

３ページ目、国家的課題ですが、環境の世紀と言われる中、「経済と環境が両立する持続可能で、安全・安心な地域社会の形成のため、世界の模範となる人と資本と自然の調和的な関係を築き上げることが、国家的な課題」である。

それから、３番目ですが、「新たな時代の潮流の変化に対応し、北海道が国家的課題の解決に果たす役割」はどんなことかということで、ここでは大きく２つに分けておりまして、１つは「企画調査部会報告における北海道の役割の今日的意義」で、これは４つの役割がありました。１つは、安全な食料の安定的供給。これらに関しましては、「安全な食料の供給、品質の良い高付加価値な食品の提供などがより重要になってきている」という

ような位置づけ、２番目の「自然環境等の保全、資源・エネルギー問題解決への寄与」という部分では、「北海道の豊かな自然環境等の保全と資源・エネルギー問題を一体的な課題として捉えることがより重要となってきている」。

３つ目の「観光・保養など国民の多様な自己実現や交流、生活の場の提供」、「国際交流拠点や教育の場としての貢献」、これらにつきましては、「国内外問わず、多様な文化の交流の場、知の拠点としての場としての北海道の価値・役割が高まっている」というような整理をしていきたいと思っております。

ここで皆さんのご意見の下に何もない、点だけという部分がありますが、これが後でまた申し上げますが、さらにこういった点に関して意見をいただきたいという意味で、点だけ表示してあります。

５ページ目です。これは、先ほどの新たな国家的課題というものも見ながら、「新たな時代の潮流の変化に対応する北海道の役割」とはどういうことかということで、６つの柱を考えておりますが、その１番目につきましては、「人口減少・少子高齢化の中で、活力のある地域社会のモデルを創出することが重要」であるという部分、それから「農山漁村の担い手の確保、コミュニティの維持など地域社会の維持や都市部と過疎地域との共生的な関係の構築などが課題」であるという部分、２つ目の柱、「環境・エネルギー問題」につきましては、「自然資源と経済活動が調和したグローバルモデルとしての環境・エネルギー対策を示すことが重要」、「自然環境と共生し、環境負荷の少ない持続可能な循環型の経済社会の形成に向けて、先駆的・実験的な取り組みを積極的に展開することが重要」、３つ目の「グローバル化の進展と東アジアの成長」という部分では、「北海道独自の位置づけ・在り方を創造し、ビジョンとして示していくことが重要」と、「競争力を高めていくための先進的、具体的な戦略を構築することが重要」、４つ目の「自立的安定経済への移行」につきましては、「人、財、資本、情報を世界から引きつける強い地域社会の姿をビジョンとして示すことが重要」、「人、財、資金、情報、技術、知識の集積とこれらの好循環を図り、地域の主体性のもとに自律的に地域が発展する仕組みを構築することが重要」であるという見方、位置づけをしていきたいという考えです。

５番目の「安全・安心な国土づくり」。これは北海道が我が国に寄与するという部分もありまして、例えば３つ目の首都圏等で近い将来に予想される大規模自然災害への対応として北海道が貢献するというのは、北海道が寄与する部分で、それから、国の責務そのものとしていかなければならない部分というものもあります。

８ページでは、「安全・安心が確保された国土の姿をビジョンとして示すことが重要」、これは国土防衛などの議論もありましたけれども、そういったものも含めてと考えております。それから、「自然資源と調和のとれた良質なストックの形成が重要」。

６つ目、「北海道の圏域の捉え方」。これも我が国への寄与というよりは、どのように北海道を考えていくか、圏域を考えていくかという部分で、北海道は非常に広く、一くくりにはできないという部分、それから地域もいろいろな地域があるということから、「人的な資源、社会基盤、自然環境などの地域間の資源・特性の多様性を踏まえ、自然や環境の保全、安全で安心な食料の供給など地域の担う国家的に重要な役割をもとに、圏域として実現すべき将来の姿を示すことが重要」と、以上のように集約してみたという部分であります。

さらに、これを今度は中間報告に向けてその全体のスケルトンをつくっていくことになるわけなんですけれども、そのときに特に重要な部分、先ほど南山部会長からもお話がありましたけれども、特に今日この部分を議論していただきたいという部分を資料４－１にまとめております。

ここについて、ちょっと読ませていただきますので、また後ほど議論をお願いしたいと思います。

まずは読みます。

【佐藤企画調整官】　　それでは、資料４－１を朗読させていただきます。

時代の潮流の変化と北海道開発の意義

「北海道総合開発計画」は、北海道における資源の総合的な開発を目的とする。一方、「国土形成計画」は、「開発」基調の量的拡大から成熟型の計画へと国土計画の目的の転換がなされ、国土の利用、整備及び保全を推進するための総合的な計画とされる。

北海道においても、社会資本ストックの維持・管理ニーズが高まるなど経済社会の成熟化が進みつつあるが、良好な自然環境や広大な国土空間、フロンティアとしての開放的な風土など、他の地域にはない優れた資源と特性を有しており、これらの資源と特性に価値を見出し、我が国の発展のために活用することが求められている。

基本政策部会においては、「開発」について、「世界的にみて持続可能な開発が重要」「開発は、単なる成長ではなく、成長をコントロールするという意味に変わってきた」「開発は、色々な力の集合により自ら発展していくという意味」「資本ストックとしてのインフラの有効活用は重要」など、開発の意義について指摘されている。

もとより資本ストックの有効活用は今後益々重要性を増すものと考えられ、「開発」は既存ストックの維持、改善、利用を含む地域の持続可能な自律的進化・発展を促す概念と考えられるのではないか。

これらを踏まえると、北海道開発の意義は、北海道の優れた資源・特質を活かしながら地域の開発を進めることにより、民の活力・地域の競争力の醸成、経済と環境が両立する持続可能な安全・安心な社会の形成など、グローバル化、人口減少下の我が国が２１世紀に直面する基本的課題の解決に先駆的な役割を果たすこと、と位置づけることができるのではないか。

以上の基本認識の下、時代の新たな潮流の中で、北海道開発において重要性が高まっている視点及び国の責務についての問題意識を整理すると以下のとおり。

（人口減少・高齢化）

人口問題は国土政策・国土管理の基本にあり、地域のあり方、住民・企業の活動のあり方に大きな影響と変化をもたらす。

北海道における急速な人口減少・高齢化により、集落の維持が困難となるような過疎地域が拡大しつつある。他方、こうした地域は農業生産、自然環境等、我が国にとって極めて重要な役割と価値を有している。

北海道が安全で良質な食や良好な自然環境を国民に提供していくことが求められる中、こうした地域の価値の保持及び過疎地域と都市との連携・共生をどのように図っていくべきか。

（自然環境、エネルギー）

限られた地域資源と環境容量の中で良質で豊かな自然環境の保持が世界的な課題であり、持続可能な経済社会の大前提となっている。

化石燃料の依存度の高い北海道が、その豊かな資源を活かし、国家的課題であるエネルギー、自然環境の保全について、先導的な役割を果たしていくことが求められている。

環境負荷の少ないエネルギー源開発､環境と共生する経済活動・生活（循環型経済社会）、自然環境を活かした社会インフラ整備等についてどのような取組みを進めていくことが重要か。

（グローバル化への対応）

グローバル化が進展し、世界の人、財、資本、技術、情報を活用、誘引できなければ、国・地域は活力を失う。特に、急成長するアジアの市場にコミットし、競争力を持てるか

どうかが、地域が持続的に成長するための必須の要素となっている。

北海道がその地理的特性と固有の資源、社会インフラ等を最大限に活用して「アジアの宝」として輝き、地域が主体的に世界に情報発信し、市場を取り込んでいくことは、我が国に多様性のある経済構造をもたらす。

具体的には、農水産物の国際競争力の強化と輸出拡大、観光等交流人口の増加、対内直接投資の増加、国際的物流システムの整備、また知的交流拠点としての役割等が考えられるが、アジアの成長のダイナミズムを地域の発展にどのように結びつけていくべきか。

（自立的安定経済への移行）

人口減少が進む中で、人間力を高め、生産性向上、高付加価値化を図ることが求められている。また、地方の時代においては、それぞれの地域の多様な個性あるいは自立なくして国の発展はありえない。こうした中、人口や財政等の成長制約下では、戦略的な発想とビジョンが重要となっている。

北海道がその優位性またグローバル化を活かし、付加価値の高い産業として、また、それを育成する方策として何に焦点を当てていくべきか。また、民主導の自立的発展を支える上で、人材育成、金融、社会資本等インフラ面において、国はどのような役割を果たしていくべきか。

（安全・安心な国土）

国民の安全・安心の確保は国の責務である。特に水害等災害に対して国民の生命や財産を守ることが国の基本的責務であることは世界の共通認識となっている。

北海道は、ロシア極東地域に接し、積雪寒冷で災害が多発する地域であり、地域住民の生活、生産活動の基盤の安定・安全・安心を確保することが何よりも重要である。

こうした北海道において、災害に強い国土、都市と農山漁村間の人口の疎密が拡大しつつある中、暮らし易いコミュニティを築く上で、どのような国土管理が求められているのか。

（多様性を有する道内の各圏域）

我が国の国土の２２％の面積を有する北海道は、自然条件や社会条件が異なり個性的な資源・特性を有する、多様性のある地域から形成されている。第６期計画では、こうした多様性を６つの圏域として捉えている。

グローバル化、人口減少・少子高齢化の進展など新たな時代の潮流の変化の中、自然や環境の保全、安全で安心な食料の供給などその資源・特性に応じて地域の果たす機能に着

目して圏域を検討し、そこから我が国に貢献する北海道の多様な姿を明らかにしていくことも重要ではないか。

具体的には、原生的な自然が豊富ではあるが集落の維持が困難な圏域、農・水産業を中心に付加価値の高い生産活動が行われつつ人口減少・少子高齢化が進む圏域、一定の人口や産業の集積が確保されうる都市圏域などについて、その将来の姿をどう描くのか。

【鈴木参事官】　という部分でありますけれども、それが、その先どうなっていくかというのが資料４－２であります。

この資料４－２は、「時代の潮流の変化と新たな計画の在り方の視点・論点」ということで、次回お示しすることになると思いますが、そのスケルトン、中間報告のスケルトンの一部というか、大きな部分になる部分の原型としてまとめたものです。これは、資料３の意見の集約的な部分からまとめたものであります。今、ちょっと説明いたしましたが、資料４－１にあります北海道開発の意義等が明らかになってくると、これを資料４－２で再度整理して、スケルトンの中に反映させていこうと考えておりますが、今の時点でのスケルトンを目指したものということです。

１番は「２１世紀の我が国における北海道の特性について」です。「北海道が有する良好なイメージや居住感、開放的な風土など、北海道には、豊かな自然環境や開拓の歴史等に由来し、定量的な評価が困難であるが高く評価すべき価値が多々ある」というような北海道の特性を整理いたしまして、結果としまして３つ目のパラグラフですけれども、「２１世紀において、我が国の持続的な成長の姿を展望するにあたり、これらは北海道が有する貴重な価値・資源であり、こうした地域の優位性を更に活かしていくことが、我が国への貢献につながる」というような整理を致しました。

２つ目が「２１世紀を展望した我が国の直面する課題」。これも今、前段で説明いたしましたが、種々の課題が新しい国家的な課題となっているというような整理であります。

３つ目が「新たな時代の潮流の変化に対応し、北海道が国家的課題の解決に果たす役割」ということで、我が国の課題の解決に貢献する北海道の役割は、１つは「企画調査部会報告における北海道の役割の今日的意義」と、「北海道をめぐる新たな時代の潮流の変化への対応」という２つの点において検討することが必要と考えております。

１つ目が「企画調査部会報告における北海道の役割の今日的意義」ということで、企画調査部会報告の中で４つの役割、課題がありますけれども、それらについても重要性が増しているという位置づけ、整理です。安全な食料の安定的供給、２ページのほうですが、

自然環境の保全、資源・エネルギー問題への解決、観光・保養など国民の多様な自己実現や交流、生活の場の提供、国際交流拠点や教育の場としての貢献、ということについてさらに重要な価値を持っているという整理です。

２つ目の「新たな時代の潮流の変化に対する北海道の役割」ということで、これは今説明が資料４－１にありましたが、それがここに入っています。「人口減少・少子高齢化社会」についてどのようにその解決のための寄与をしていくかという部分。２番目、「環境・エネルギー問題」についても、北海道がどのようにこういった問題に対してモデル的な対策を示したり、先進的に取り組んでいくかという部分。「グローバル化の進展と東アジアの成長」ということの中で北海道の特性を生かした在り方をビジョンとして示すということもありますが、さらに大きな問題としては、②にありますが、ＷＴＯ体制のもと、ＥＰＡ（経済連携協定）の拡大とグローバル化が進展する中で東アジアの成長のダイナミズムを地域の持続的発展に結びつけ、競争力を高めていくための先進的、・具体的な戦略を構築するというような部分が、新たに時代の流れの中で加わってくるのではないかと考えております。

「自立的安定経済への移行」ということで、自律的な発展の仕組みの構築といったような課題目標。５番は、「安全・安心な国土づくり」。これにつきましては、先ほどもちょっとご説明しましたけれども、これは日本全体も同様な問題を持っているわけですが、その中で北海道も、その安全・安心が確保された北海道という姿をどのようにビジョンとして示していくかというような部分が必要となってくると考えています。

６番目の「北海道の圏域の捉え方」。これも先ほど資料４－１で説明致しましたけれども、「人的な資源、社会基盤、自然環境などの地域間の資源・特性の多様性を踏まえ、自然や環境の保全、安全で安心な食料の供給など地域の担う国家的に重要な役割をもとに、圏域として実現すべき将来の姿を示すこと」ということで、そのようないろいろな圏域「原生的な自然が豊富であるが集落の維持が困難な圏域」、「農・水産業を中心に付加価値の高い生産活動が行われつつ人口減少・少子高齢化が進む圏域の在り方」、「一定の人口の集積が確保されうる都市圏域の在り方」、それから「人口集積が高く、今後グローバルな競争力の強化が期待される道央圏の在り方」といったそれぞれの圏域についても将来の姿はいろいろ変わってくるのではないかということです。こういったことを先ほど申しましたようにスケルトンとして盛り込んでいきたいと考えておりまして、資料４－１の部分がその一番の基本になりますので、その部分についての議論を特に今日はお願いしたいと考えて

おります。

【南山部会長】　どうもありがとうございました。

いろいろ御説明がありましたけれども、ポイントは資料４－１、資料４－２に向けての資料４－１ということであります。皆さんにいろいろと御意見をいただきたいと思っておりますけれども、この資料４－１について議論をいただく、今日はそうしたいと思っています。

これには、前文に基本的な考え方として、開発の意義、それから、それに伴って現下の時代の潮流の変化に向けての項目として６つございます。これは一遍にやりますと、またぐちゃぐちゃになりますので、順々にやらせていただきたいと思っております。その前にごらんになっていただきますと後ろに参考資料１がございます。これは濱田委員から北海道開発の意義についてご意見をいただいております。濱田委員には、またこの議論の中で御発言いただければと思います。

それでは最初に、資料４－１の１ページ目の前文に相当する部分、北海道開発の意義というところで論点が幾つかございました。北海道の資源と特性に価値を見出して我が国の発展のために活用することが求められている、あるいは、開発が既存ストックの維持・改善・利用を含む地域の持続可能な技術的発展・進化を促進する概念と考えられるのではないかと、そういうことを踏まえると、我が国の２１世紀に直面する基本的な課題の解決を考察することではないか、そういうのが開発の意義ではないかと、そういうようにまとめられております。この点について、まず皆さんにいろいろ御意見をいただき、次に、人口減少あるいは自然環境、それぞれについてまた少しずつ時間をとって御意見をいただきたいと思います。

それでは、最初の前文の部分の基本的な考え方について御意見いただければと思いますが。

【家田委員】　では一言。

全般に言うと、何か少し丸いんじゃないかと思うんですよね、書きぶりが。

【南山部会長】　丸い？

【家田委員】　丸っこい。もっと先鋭性がないと、こういう時代に何か政府から物を出すには意味が薄いと思います。これは資料４－１だけでなくて、大体どれもそうなんですよ。ここまでも随分いろいろな意見を私も出したし、いろいろな人も出したと思うんだけれども、それがみんな丸くなっちゃって、結局、何も言わなくても同じというような表現

にしか残っていない。それだと、ちょっと今どき審議会なんかやっている意味があるのかという感じが１つありますね。これは全般です。

それから、今のお話の部会長さんからあった部分について言うと、この先駆的な役割を果たすことということだけに集約されているんだけれども、ここで言っているのは、要するにいろいろな問題があるんだけれども、その問題が一番最初にパンチを受けるのは北海道だから、そこで先駆的にやるんだって、そういう非常にネガティブな表現だと思うんですよ。言葉こそ先駆的で前を向いているんだけれども、意味は、一番つらいところだもんねと言っているのと同じですからね。

そういうことだけではなくて、聞きかじりですけれども、例えば農業で言えば――これは聞いた話なので、別に私のオリジナルじゃない、聞いたばかりの話なんですけれども、実は――減っていく中でも代替できている。要するに、放置される農地は北海道では非常に少ない。ほかの人がオーバーテークする。それで１人頭の耕地面積が広がって、もちろん課題は多いけれども、そういうところは全国の様子とは全く違う展開が見えているわけですよね。決してそれが全国で同じことができるとは思えないので、それは先駆というよりは、むしろポジティブな面としてとらえるほうがいいし、ちょっとここの「先駆的な役割を果たすこと」というところの意味合いが少しなあというところが１つ思いました。この１ページはそういうところです。

以上です。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかの皆さんで何か御意見ございませんか。

【濱田委員】　まず、１つ質問なんですけれども、資料４－１の前文に相当する部分と、それから「人口減少」以下のところ、ここのところが資料４－２のどこかに入っているんですよね。その構成がよくわからなかったのですが、資料４－１の１ページ目は全体の総論というか前文、そういう位置づけで読んでよろしいのでしょうか。

【鈴木参事官】　ええ、そういう位置づけです。

【濱田委員】　それで、最初のところに開発の意義ということを時代に即して考え直そうという話が資料４－１の１ページ目にあるんですけれども、私もそれは非常に賛成で、参考資料を用意してきたのですが、よく我々が「北海道開発」という言葉を使うと、今ごろ開発なんて何言っているんだと、どこを開発するんだという、非常に単純な反論が返ってきます。これはなかなか単純だけに、対応がなかなか難しい反応なんですね。私は、原

始的開発反対論というふうに言っていますけれども、そういう人々がイメージしている「開発」とは、１９世紀から２０世紀にわたって行われた、いわゆる開拓というのと同じような概念。荒野を開くという、そういうイメージに代表されたものだったと思うんですね。そういう意味だったら、当然、今それをやる必要なんか全然ないので、ではなぜまだ「開発」という言葉を使っているんだという、そういう潜在的な疑問というか、そういうものがあるだろうと。だから、そういうことに前文で答えておこうということで資料４－１の１ページ目が工夫されたのだと理解いたしました。

これは、私は非常に賛成で、「開発」という言葉が意味するものは少しずつそれも進歩して発展しているんだと。私は参考資料１にちょっと書きましたけれども、「開発の概念の展開について」というところなんですが、現時点で考えれば、「地方と都市」とか、「農村と工業」とか、それから、「経済成長と環境」とか、そういう対立図式が常に存在するわけで、それらの対立図式をどういうふうにうまく調整して経済成長という課題に結びつけていくかという、いわゆる調整というものを含んだ開発なんだろうと、やや抽象的ですけれども、そういうふうに私も考えました。

それから、「開発」と言うと、どうしても道路をつくるとか、物づくりの方向に目が行きがちなんですが、今我々が使っている「開発」は、もっと文化的な面も当然含んでいるだろうと。それから、「開発」と言うと国からお金をもらって、いわゆる外部から資金をもらって、それを内部につぎ込むという、そういうふうに思われがちなんだけれども、それだけではなくて、地域の持っているさまざまな資源をどういうふうに使っていくか、いわゆる「内生的開発」と私は呼んでいますけれども、そういうことも含んでいるのだと。私の考える「開発」とはそういうことなんですけれども、そういうことを前文に書いて、前段に私が申し上げました非常に原始的な誤解に対して答えておくということは非常に意義があると思っております。

以上です。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

ほかの方で何かございませんか。よろしいでしょうか。

【櫻井委員】　　各論としては次の「人口減少」云々のところにむしろかかってくるのかなという気もするんですが、１つはこの前文のところの下から２段目ですね、「これらを踏まえると」というところがまとめの部分で、「北海道開発の意義は」ということで書かれているんですけれども、ちょっと全体として開発とは何かというところにやや引っ張ら

れ過ぎているかなという気がしていまして、開発の意味はいろいろあるんだよとか言ってみても、まあそれはそれでいいんですけれども、私としては、その前の段階で、北海道のロケーションとしての重要性といいますか、これは前にも申し上げたかもしれませんけれども、北海道が国の一部であって、「均衡ある発展」と言うと古くなっちゃいますけれども、やっぱりそこがバランスよく全体の中で発展していくということが国土管理という観点から、それから国土維持という観点からとても大事で、国民経済的にも重要だということを前提として振っていただいたほうが、開発オンリーではないということになるので、深みが出るのではないかと思っています。

前に、一番最初のときに私、「端っこだと思っている」というような発言をしたと思うんですが、あまりいい言葉ではないんですけれども、ただ、端っこが今重要というところがあって、有事の話はともかくとして、竹島にせよ、尖閣諸島にせよ、やっぱり端っこは大事なんですね。あと、合併の議論などでも、大体どこも合併するとき、自分が端っこになりたくないということで動くわけで、そういう境目のところ、際のところはとりわけ気配りが重要なところであるということを書いたほうが、まさに北海道の特色だということになるのではないかと思いますので、そういう点を加えていただけるとよろしいのではないかと思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

【小磯委員】　すみません、今日はおくれて参りまして申しわけありませんでした。

おくれた理由は、私、地方から来ているものですから、朝一番の飛行機に乗っても１時半の会議に間に合わない。時刻表では間に合う予定になっているんですが、実は現在の航空路線運行でいきますと、釧路の発着便は、朝一番は東京から飛んできて、それが釧路から東京への第一便になると。そうすると、時刻表どうりいかない可能性が東京発に比べると随分あるのです。なぜこの話を最初に申し上げるかというと、やはり地方のハンディというのはやっぱりいろいろな形であるということです。

それで、最初にこの前文を読ませていただいたんですけれども、北海道開発を進めていくというその時代的な意味は、今、櫻井委員からもおっしゃった部分に通じるところもあると思うんですけれども、やはり市場から離れた地方部が健全な姿でどう生き抜いていくのか、その発展モデルを示していくという意味、それがやっぱり北海道開発のこれは１つの意味として私はあるのではないかと感じております。そういった趣旨という部分がもう少し読み取れればいいなというのが私の率直な思いです。

ここでは、「開発」という言葉についてかなり細かく整理されて説き起こしておられますけれども、この考え方そのものは私は賛成です。やはり、ややもすると、その「開発」という、まあ言葉の問題になるかもわかりませんけれども、それをほかの言葉に置きかえていく流れがあるんですが、やはりディベロップメントという、これは世界のどの地域にとっても、やはり特に地方部が発展していく上での大事な概念ですし、特にサステーナブルという、そういう持続性を持ったという意味合いでこういうふうに整理しておられる、この方向性は、私は大変大事だと思います。

ただ１点、この中でいろいろ書いておられるんですが、１つは、環境とか共生という視点が今、開発の持続性という面で議論されている中で、やはり環境容量に見合った発展を目指していくという考え方がさらに付加されればいいのではないかと感じました。

以上です。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかに。

【狩野委員】　私は、この前文を読んでおりまして、北海道が非常にいいところであるという前提に立っているように感じます。例えば「北海道の優れた資源・特質」とありますね。その「優れた資源」とは何なんだろうと考えますと、上のほうには「良好な自然環境や広大な」というようなことがありますね。それが資源だということになりますが。以前の北海道が持っていた石炭であったり、漁業や、林業や、いろいろなものが昔は強かったんですが、グローバルな中では競争力をなくしておりますから、この「優れた資源」というのをもっと具体的に言っていただかなければいけないし、それほど「優れた資源」があるわけでもないのではないか。もっとクールに北海道を見つめて、どこをどういうふうにしなければいけないのか。例えば、空間があるということは、人間が少ないから空間があるのであって、いいところならもっと人が住むはずだ。東南アジアに比べましてね。そういうところがいいんだというのだったら、その広さをいかに活かすかということにつながるのではないかと思いますので、この文章、この前文につきまして、そういう印象を持ちました。

以上です。

【南山部会長】　ありがとうございました。

【家田委員】　今、関連して。

今、狩野さんが言ったので、やっぱりここの前文の意味合いがちょっともう一つよくわ

からないんですけれども、何が北海道なのというところと、何で開発なのというところに答えようとしているんでしょう。その「何が北海道なの」というので資料４－２に関連して北海道の特性というのが幾つか書いてあるんだけれども、そういう種類のことをもっと要約してすぱんと言う必要があると思うんですよ。

それで言っておくべきと思って申し上げるんですけれども、「良好な人的資源」という言葉があるんだけれども、「良好な人的資源」というのは、非常に高学歴で、そして同時に国際性も豊かで、そして技能もあるし、技術もあるしと、そういうようなことを普通は「良好な人的資源」と言うんですけれども、私が考える人的な意味での北海道の最大の資源は、社会的にオープンな特徴を持っているということですよ。したがって、よそとのハイブリッドな交流ができる。それは日本で一番恵まれていますからね、北海道は。それは全然書いていないんだよね。だから、１個だけ僕が特徴を挙げろといったら、それを挙げますよ、北海道で。しかも、それを活かすような自然資源やあるいは農業資源が、非常に質の高い農業資源がある、そんなことを書けばいいと思う。これが今、狩野さんがおっしゃったのにちょっと便乗して申し上げました。

それから、先ほど開発云々の話があったんですが、私はちょっと濱田先生と意見が違いまして、「開発」という言葉を北海道局だけが独自の定義をしてみたって始まらないんですよね。国民的な用語ですから。それで、国土形成計画法的な世界では、「開発」という用語はもうこの時代ではないと言っているわけですから、それを、北海道では違う意味だと言ってみたって始まらないんですよね。それよりは、「開発」という言葉を歴史的な経緯から北海道ではまだ使っているけれども、その意味はもはや昔の「開発」ではないんだと。こういうむしろ国土形成に近いことで使っているんだというふうにさらりと言ったほうが、櫻井先生も似たような意味ではないかと思うんだけれども、私もそっちの感じを持っています。

以上です。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

【北委員】　　私も基本的にはこういう形でいいのではないかとは思いますが、もっとやはり北海道としての特性、この中にも書いてはありますけれども、いわゆる安全・安心というか、こういったことを前面に出す必要がある。その中で、特に生産性の問題でございますが、特に農業生産性の問題。今、牛乳も余っているだとか、さまざまな課題がものすごく深刻になっていますが、一方で酪農も含めて農業全般、米もそうですが、北海道は一

番トレーサビリティーが徹底されている。全国的にもそういうシステムになっておりますけれども、トレーサビリティーがきちっと北海道の広大な地域でできていて、安全・安心な食物ができる。それからやっぱり基盤整備は相当、土地改良を含めてできてきた。このことによって米などの質が相当よくなって、蛋白量が非常に少なくなって、全国的にも決して引けをとらない味になっているんですよ。

ただ、生産費が問題なんです。あの広大な地域で、しかも、１戸当たりの面積が広くて、いいものができた、おいしいものがある、しかも輸出も可能だという中で、コストをどう下げるか。

具体的に言いますと、田植えなどをするのでも、３年に一遍か５年に一遍、どうしても田植え機を変える必要がある。そうすると、それに３００万円、５００万円とかける。これが生産費に上積みされてくる。加えて、今までの土地改良の借金がある。これさえなければ、国際価格とまではいきませんが相当の生産費の低減に役立つ。そうすると、農業においては国内では絶対優位に立つと思います。やはりコストをどう下げていくかということがこれからの大きな課題だと思います。そんな思いをしております。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

この問題は多分、ずんずんと議論していけば切りがないと思いますので、この後、６つの各論を少し議論していただいて、その後で、また場合によってはこの一番最初のところに戻って伺いたいと思います。

それでは、各論の問題意識の整理をする観点から、１つ目の人口減少と高齢化の件について、ここに書いてあることに対する御意見、あるいは皆様の御意見等いただければありがたいと思います。どなたでも結構です。

櫻井先生、さっき何か人口の減少の問題ということで何かお話しがございましたが。

【櫻井委員】　　ええ。ではちょっとだけ補足しますと、要するに放っておくとさびれていくという問題があって、それに対する積極的な役割というのは、国が補完的に、しっかりと大事なところはサポートしていくということが必要なことであろうと思うわけです。

人口問題とか、それからさびれないようにどうするのかという話は、例えば都市計画で今度、中心市街地活性化法のようなものができましたけれども、あれは都市機能というものをなるべく、消滅する集落が一方であると同時に、そういうスポット的ににぎわいがあるようなエリアをつくっていくという、そういう発想なので、その人口も含めて、それから商業とかそういう形でのある種のスキームみたいなものができるといいのではないか。

都市計画、改正された法律などを活用する道もあるいはあるのかもしれませんけれども、そういった観点で国の役割、国というか、あの場合は、都道府県ということになりましたけれども、何しろある種のてこ入れみたいなことがどうしても必要なエリアであろうということでございます。

【北委員】　　人口減少、まさにそのとおりで、今、最大の課題なんですけれども、前にもちょっとお話し申し上げましたが、合計特殊出生率の低さは大都市が足を引っ張っており、むしろ地方は健闘しているという話を具体的な例としてさせていただきました。やはり地方においては、自然環境に子供の頃からずっと触れ合い、そして自然をどう大切にするかということ、自然とともに成長していくということは、命を大切にすることであることを感じながら成長している。そして、地方のよさは向こう三軒両隣ではありませんけれども、地域で支え合うという、非常にいい特徴的なものがございます。

そういう意味で、私どもの町もそうですが、言えば自分たち独自で支え合う制度をつくっている。やはり自然を大切にしながら成長していく中で、その自然の中に命がある、それが子供を育てようという発想が自然的に出てくるのではないか。こういうこともありますから、地方における取り組みをもっともっとどういうふうにしているかということをきめ細かく、小さな町、小さな村の出生率が非常に高いんですよ、こういうところにやはり注目して分析していく必要があるのではないか。保育政策なども、もちろんこれは大切なことでございますけれども、ただそれだけに目を向けて、それで解決にほんとうに向かうのかどうかということを私は非常に疑問を持っております。少子化対策の中ではもっともっと地方のやっていることをきちっと理解しながら、分析をしながら、評価しながら、いいことはいいとしてやはり育てていく必要があるのではないかと、私はそう思います。

【南山部会長】　　ありがとうございました。ほかに。

【家田委員】　　ここの人口のところと、それから後ろの「安全・安心」とちょっと絡んじゃうので、そこのところをまとめて言っちゃうんですけれども、冒頭申し上げたように、これはもう少し北海道の特徴的な視点で書かないと、このまま「北海道」と書いてあるところを「東北」にしたってどこだって同じになっちゃうんだから、これでは全然しようがないですよね。

それで、そういう点で２点申し上げようと思うんですけれども、１点目は、さっきもちょっと申し上げた食料、農業関係なんですけれども、これはもう聞きかじりなので間違っていたら直してほしいんですけれども、とにかく人口が減っていく中で、農業から撤退す

る人がいると。しかし、その農地は別に放ったらかしになるんじゃなくて、違う人が、近所の人が買って農地になっているんですよね。それが１戸当たりの農地面積の拡大には役立っているんですよね。だけれども、伺ったところによると、それが飛び地みたいになっていて、実は連続になっていないものだから、農地面積は広くなっているわりには効率的が上がっていないんですよね。

ということは、人口が減っていくという局面は、さらにそれが進むと。今ここで単に買っていればそれでいいということではなくて、区画整理みたいなことを積極的に促進する。それによって新たな大規模化と効率化、もっと言えばデンマークみたいにしちゃうというようなことをやるチャンスなのであると。それが北海道じゃないとできないんですね。日本のほかの地域はテークオーバーされていませんから、単に荒地になっているだけですから。北海道だからできるんです。それをもっと鮮明に出さないと北海道らしくない。これが１点目です。

２点目は、人口減少していくので、今度は民生系の話ですけれども、人口密度が低くなりますよね、もう少し。しかし、その人口密度のレベルは、今もそうですけれども本州と全然えらく違いますから、もっとずっと低いんですよね。一体その人口密度が本州の平均よりもかなり低い人口密度のところでどのくらいのモビリティーを確保するのが交流に最低限必要なものなのかと。

しかも、冒頭申し上げたように、北海道の一番これからのやるべき価値というか資源は、社会的なオープン性なんですよ。つまり交流で生きていくしかないんです、農業以外は。ということは、普通にただそこら辺の人とつき合っていればいいという交流じゃなくて、都会の人もちょいちょい来るとか、そういうモビリティーを確保して初めていけるわけでしょう。じゃ、人口の低いほかの地域で、よその国でどんなふうにそれをやっているかというのを比較しながら北海道の交流を活かすべき低密度の北海道ではどんなモビリティーを確保すべきかをじっくり研究し、そして、それを目標にしてねらっていくのだったというたぐいをここで入れておくと、これはもうユニークな話になるんですね。

ということを２点申し上げました。以上です。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかにこの件で何か。

時間の関係で大変恐縮ですけれども、それでは、また最後にカテゴリーを問わず御意見をいただく場をつくればと思っていますが、では、「自然環境、エネルギー」について、

ここの書きぶり、あるいはここにこういう観点から書くべきことについて御意見いただければと思いますが。どなたでも結構ですが。どうぞ。

【山本（博）委員】　前文のところでも指摘があったことと重なるんですけれども、ここの３行目に書かれております「豊かな資源を活かし」という表現が出てまいりますけれども、それは何を指しているのか、もう少しこの中で認識をそろえておかないと、いろいろな想像がここでは出てしまいまして、私などの立場で言いますと、これは森林資源を使ってエネルギー化していくとか、そういうふうな理解もできるのですが、そのほかにもいろいろな解釈があろうかと思いますが、この「豊かな資源」とはここではどういう意図があるのか、もう少し明確にしておいたほうがいいと考えます。

【南山部会長】　ほかにございませんか。

鷲谷委員、何かご意見ございませんか。

【鷲谷委員】　その豊かな自然環境などを維持しながら環境と共生する経済活動を発展させていくという観点なんですけれども、個人的な経験からの印象なので、もしかすると小さいことを針小棒大に意識している面もあるかもしれないのですが、自然的、人的な今の北海道の資源の状況から見て、ＬＯＨＡＳなど、今までのように量を重視するよりも、質を重視するような価値観やライフスタイルを大切にする人たちをツーリストとして、あるいは第二居住地の住人として受け入れることのある条件がかなり高いのではないかと思うんですけれども、それはおそらくサービスを提供する側もそれに対応するような価値観の転換があって初めてうまくマッチしてそういうかなり経済効果の高い人たちを引きつけることができるのではないかという気がするんですね。

観光なども、共生型で自然への負荷は小さくて、だけれども滞在型でしばらくいてくれて、そういう意味では大きな経済――人数が少ないとそれほど大きくはないかもしれないんですけれども、でも、大量に動いてくれて自然と共生はしがたいような観光の在り方と同じくらいの経済効果を少人数でもたらせてくれるということもあると思いますし、国際的という意味でも、アジアだけじゃなくておそらくオーストラリアあたりから余裕のある方が、１０日間ぐらい北海道に滞在してオーストラリアの夏の時期に北海道は冬ですから、ウインタースポーツなどを楽しみ、温泉を楽しむというような過ごし方、行くのだったらヨーロッパのアルプスとかカナダに行くよりは日本の北海道に行くというような、そういう選択もあり得る、北海道の側の意識が若干変わったらあり得るような気がするんですね。

大人数で画一的なお仕着せの旅が今までの北海道観光のイメージだったような気もする

んですけれども、そうではないサービスの提供の仕方、もうおそらく始まっているのではないかと思いますが、そういうことが重要な気がします。

それであと農産物も、やっぱり自然環境があってこそ消費者にとって価値が高いという面もあると思うんです。それで、単に価格だけで物を選ぶような、あるいは価格プラスちょっとした安全ぐらいを基準に物を選ぶのではなくて、もっとライフスタイルとか価値とかで物を選ぶ消費者で、北海道の環境も含めて例えば常に根釧台地の牛乳しか飲まないとか、そういうのは実際の生協とかを通じてそういう消費者もいると思うんですけれども、そういう消費者を獲得することにもその自然環境が生きてくる。環境とか農業で確実な消費者と言ったらいいでしょうか、すぐに気が変わってしまうのではないような消費者を獲得する、そういうことに生かすためのサービスの在り方を検討していくといいのではないかと思います。

【南山部会長】　ありがとうございます。オーストラリアの件は、まさに今先生がおっしゃったような状態で進んでいて、残念なのは、始めたのがオーストラリア人というのが、これが非常に残念なんですけれども、しかし、周りの富良野とかそういうところの人もあれを見て、やはり工夫がされつつありますね。その意味ではそういうきっかけをつくっていくのは大事だと思います。

ほかにございませんか。

【川島委員】　ちょっと気になったということで申し上げたいのですが、ずっとこの文章を通して見てみますと、相当に工夫されて、そのエッセンスを抽出した文章になっているのかなと見ておりました。

一生懸命この文章、短い文章の中からどういったことを語りたいのかということを想像しながら読んでいたわけですが、その中で、実はちょっと気になったのが「化石燃料の依存度の高い北海道が」というこの前文句で、以前いただいた資料の中に確かに１人当たりの化石燃料依存度が北海道はほかに比べてはるかに高いというのがあったかとは思うんですけれども、その定義の仕方とかそういったところがほんとうにきちっとできているのかというのはちょっと気になりました。正しければもちろんこれでいいと思うんですけれども、実感として北海道がそんなに化石燃料がすごく依存度の高い地域なのかがいま一つぴんと来なくて、人が分散して住んでいるがために１人当たりのそういった消費が多いというのであれば、それはそれでわかるんですけれども、北海道全体として例えばすごく消費型の経済構造を持っているのかというと、そうでもないように思うわけで、ここにこの言

葉がそのまま残ると非常に抽出されているがゆえにこの部分はひとり歩きするのではないかとちょっと懸念した次第でございます。

【南山部会長】　ありがとうございました。

これは、量でなくて、割合としては高いということだと思いますが、一番大きな原因は、多分、冬場の暖房だと思います。これがあるために北海道は突出して化石燃料依存度が高い。ただ、それを除けば、多分、そんなによそと違うことはないと思っていますけれども。いずれにしても精査していただく必要があればそうさせていただくことを考えると。

ほかに「自然環境、エネルギー」のことでよろしいでしょうか。

それでは、また時間の関係上、次にとりあえず移らせていただきまして「グローバル化への対応」、言葉はちょっとやや漠然としておりますが、中身はここに書いてあるようなことを頭に書いてあるわけですけれども、これについて何か御意見等ございますか。

【家田委員】　１つだけ、細かいことですけれども。

「アジアの宝」という言葉があるんですけれども、もちろんアジアの宝になるにこしたことはないのですが、リアリティーがあるのかなと思うんですよね。つまり、僕、これ気になったのでいろいろなところで北海道の人たちに「アジアの宝」って実感はあるんですかと言っているんだけれども、ほとんどないですね。それからまた外国人に聞いても、何言ってんのって感じで。だから、もしこれを書くなら、よっぽど根性入れて東アジア圏で圧倒的にここがエメラルドと言えるというぐらいのことを覚悟して言わないと、後で切るんだと恥ずかしいでしょう。という感じを持っています。僕自身が違和感を持っています。話の上で言うにはいいけれども、こうやって書くような自信があるのかどうか。どうですかね、これは、お書きになった方は。

【鈴木参事官】　恥ずかしいといえば恥ずかしいのかもしれません。非常に魅力的な言葉というか、北海道の特徴をつかまえているのではないかと希望的に解釈しているわけですけれども。

【家田委員】　つまり、道民が見るんじゃないからね。日本の国民全員が見るんでしょう。

【鈴木参事官】　はい。

【家田委員】　そのときに、何言ってんのという感じで大丈夫でしょうね。九州の人は何と言うか。

【鈴木参事官】　わかりました。少し言葉を、もう少し選んでいきたいと思います。

【吉田北海道局長】　海外観光客は、去年、４３万人、９割が東アジアの方ですね。

【家田委員】　北海道の人から見ればそうだけれども、では、アジアの中でアジアの人が行っているところは、北海道だけ行っていますか。違うでしょう。九州のほうがはるかに行っていますよ。

【吉田北海道局長】　さらに、今まで北海道の観光客は、国内からの観光客は夏の方が非常に多かったんです。アジアの方は１シーズン全部通して、冬でも来ているんです。

【家田委員】　もちろん知った上で言っているんだけれども、北海道の人が自己満足で使っているような言葉じゃまずいんですよ。それから、どこかで講演して励ますようなときに使う言葉と、ちゃんとした答申文書で自信を持って１０年ぐらい使っていけるようなものというのは、やっぱり覚悟して書かないといけないと思うんですよ。用語に対して。

【吉田北海道局長】　わかりました。

【家田委員】　こういうところは何か先鋭的に言っているわりに、ほかのところは何か丸っこくなっちゃっていて独自性がないでしょう。

【南山部会長】　ありがとうございました。

それではほかにございませんか。

【山本（博）委員】　「農水産物の国際競争力の強化と輸出拡大」という表現がございますが、私は林という立場で申しますと、資料２では「農林」という「林」という言葉がここでは入っておったのですが、資料４－１、２になると「農水」という、「林」が抜けてしまっているのは非常にさみしい感じがいたします。

それで、次の話として、この「輸出拡大」という言葉について林の立場から言いますと、ちょっと違和感といいますか、ここの資料４－１では「グローバル化への対応」という枠組みの中で書かれるとこういう輸出拡大という話につながるのかと思いますけれども、片方の資料４－２を見せていただくと、ここでは場所がちょっと違っておりまして、「安全な食料の安定的供給」とかそういうところに含まれてこの議論が出てくるわけなんですけれども、少なくとも林という立場で申しますと、その輸出の拡大以前に、まず国内のマーケットでのシェアの拡大が先にあって、その次のステップとして輸出拡大という話につながるのではないかと感じました。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかに。

【北委員】　今に関連。

ある面ではそのとおりだと思います。ただ、やはり輸出も相当視野に入れて考えていくことも、これまた大事なことですから、そのためにまず北海道生産物を競争力の中できちっと国内の人にまずはオールジャパンで食べていただくだとか、使っていただくだとか、こういうことの優位性を保ちながら、同時に、やはり外国にも輸出するということが大切だと思います。「地産地消」という言葉がありますけれども、道内で米の消費が非常に少ないだとか、６０％ぐらいだとか、あるいは牛乳も逆に言えば生産地みずからもあまり飲んでいないだとか、こういうこともありますから、こういったことも含めて国内対策をきちんとしながらマーケティング、輸出にもきちっとその優位性を保ちながら持ち出していくことが必要でないか、あわせて考える必要がある。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

【狩野委員】　　グローバル化と、それから競争力という観点について申し上げたいんですけれども、北海道の場合に、いろいろな観光客の話もありましたし、いろいろな農産物もありますけれども、やはり強調すべきはクオリティーだと思うんです。１人が生活するにおいての生活の質ということを言えば、東南アジアは住みやすいところですから、人がもうわんさと住んでいて、やはり１人頭の住居空間も狭い。クオリティーがやはり北海道はあります。そういう意味での空間、それから環境のクオリティーとあるわけですけれども、もう一つは、ここ観光とか農水産物があるわけなんですけれども、私ども製造業から言いますと、なかなかクオリティーの高い製品をつくっている企業がおありになります。前の資料にもありましたけれども、D社、ダイナックスという会社さん、それから室蘭の新日鉄。これは特殊鋼では非常に競争力がございます。あるいは、北町長の奈井江町にもすばらしい会社がありまして、超硬チップなどを輸出もされています。そういう意味で、北海道の製造業においても特徴のある競争力がありますから、そういったことをもっと育てよう。

それと同時に、今、ここにも書かれているのは、「アジアの宝」になるような観光とか食においてもクオリティーで競争していけばいいのではないか、そういうふうに提案したいと思います。

【北委員】　　全くそのとおりでございます。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

ほかに。

【川島委員】　　２点ございまして、１つは、この「グローバル化への対応」という中に、

先ほどから家田先生が何度もおっしゃっておられますオープンというような特性ですね。これをやはり活かしていくという、そういったことをやっぱり書き加えておくべきなのではないのかなと思っております。

やはり、国際化していくに当たって北海道の特に強いところというのは、もちろん気候風土であったり、土地の広大さであったり、いろいろあるわけですけれども、その中の１つの重要な観点としてオープンな国民性というか、道民性は大きな利点であろうと思います。

それからもう１点は、前回のときにもちょっと申し上げたんですけれども、千歳空港、ここでは固有の資源とか資産とかというものというところに当たるんだと思うんですけれども、これをやはり国際化していくということは非常に重要で、この点が現在、ちょっと調べてみたんですけれども、千歳空港の乗降客が年間１，８００万人いると。この数は、大阪の伊丹空港とほぼ一緒でして、関西空港よりも多い。福岡の福岡空港ともやや一緒だという、そういう数字なんですが、一方、国際と国内の乗降客というところで見ますと、福岡が１７０万人いらっしゃるのに、千歳は４３万人しかいない。非常に立派な空港と設備を持っているんですけれども、極端に国際空港と言うわりには国際の路線とか乗降客の数が少ないというような状況がありますので、やはりこういったところは有効活用して、ここを基点に広げていくみたいなことを考えていくのがいいんじゃないのかなと思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

この観点から何か皆さん、こういう見方をというようなことで御意見ございませんか。

それでは、また次に移らせていただきまして、次はいろいろ御意見あるかと思います、「自立的安定経済への移行」という観点から考えるべきことについて御意見いただければと思いますが。

【家田委員】　私の感じでいくと、さっきどなたが言っていたのか忘れたけれども、自立的安定経済のようなものが先に来て、それからグローバル化のほうがいいのではないかと私も思いましたが、その上で申し上げるんですけれども、確かに今、幾つか、狩野さんからも出たし、いろいろ出たような、こういういい素質がありますというか、がんばっていますということは大いに書かなければいけないんですけれども、だけれども、それだけだと、じゃ、それでいいじゃないとなっちゃうわけだから、いわばポテンシャルとしての素地というものを述べつつ、しかし、それがさらに飛躍するためにはここにネックがあっ

て、それをやっつけることがさらなる発展にいくんですよという論理がないといけないですね。

そういう意味からすると、この「自立的安定経済」のところに関連して言うと、狩野さんがおっしゃるような意味でのちゃんとした――ちゃんとしたと言うのも何だけど、優良な企業が来る。しかし、一方で、苫小牧あたりにはいろいろな土地もあるけれども、なかなか思ったとおり進むわけではない。何がネックなんだろうか。そうすると、先ほど小磯先生がおっしゃったんですかね、飛行機の安定的な輸送がどうなのかとか、そういうことが産業の立地にネックならば、そこを片づけると。がんばってでも片づけるしかない、やらなければいけないんですよね。

僕はやっぱり、北海道は土地の優位性や何かはあるし、それから、農業優位性も非常に高いと思うんですけれども、やっぱり産業、一般産業からすると、冬の積雪と非常に寒冷気候と、それに伴うモビリティーの制約というのはやっぱりネックになっているんじゃないかと思うんですよね。その辺、北海道局の方のほうがもちろんお詳しいので、書くならそこを書いたほうがいいと思っています。産業については。

それからもう一つは、農業に対しては、僕は大変に期待の強い領域で、多分、世界最高水準の農業を目指すんだと。水準というのは資質的にね。だけれども、それだけではだめで、農業、要するに第一次産業として出たものを第二次産業としてつなげていくんだと。食料確保、そして高付加価値化、で、それを流通に乗っけていくと。したがって、一、二、三を全部足すと三、四、五、六次――六次産業化くらいな感覚がなければいけない。しかも、それが赤福に出しているからいいでしょうみたいな感じじゃなくて、道内でぐるぐる経済が回ると。内生化ですね。経済の内生化。別に閉塞化という意味ではないんですけれども、中で回る度合いを高めないといけないですよね。経済の内部循環を高めるというような、そういう表現が、まあ「高付加価値化」という言葉とか、読んで読めないことはないんですけれども、あまりにも一般化、平たい表現になっちゃっているから、何か独自性が――また同じことを言って悪いんだけれども、ない。だから、ぜひ食料とその周辺加工産業と、それの高付加価値化産業が一体として扱うんだと。もう北海道では一次、二次、三次という分けは無意味だと。農業を中心とした六次産業化ぐらいのことを打ち出すぐらいな意気込みがここには欲しいと思いました。

【南山部会長】　ありがとうございました。私ども経済会でも六次産業ということで、しかも掛け算だと。だれかがゼロになっちゃったら全部ゼロになっちゃうということで今

やっていますが。

ほかに御意見のある方、どうぞ。

【小磯委員】　「自立的安定経済への移行」という、まさにこの部分、これはこの開発政策のまさにかなめの部分、何で食っていくかということだと思うんです。私はやっぱり、もう少しわかりやすいメッセージをいかに出していくかというところ、そこがポイントかなと。今も議論に出ましたけれども、一次、二次、三次的な枠組みではなかなか見えづらい時代になっている。

私個人としては、わかりやすく言えば、まず１つは、まず外からどういうふうにしっかり稼いでくるかという部分。その中では、私はやっぱり一次産業、特に農業の力。それから製造業。これは今までは非常によかったところです。でも、やっぱりその課題を克服しながらも、何とか。それからもう一つは、言わば人の輸入産業として外からしっかり消費をもたらす観光が重要、それらでしっかりとした稼ぎをしながら、あとはやっぱりみずから足元を見つめ、これは前回、前々回も申し上げていますけれども、やっぱりきっちりとした内的循環、しっかり地元の足腰を鍛えていく地域内循環というものを見据えながら、内部の市場も強化していくという、やっぱりこういう明確な図式の中でそれぞれを個別の課題との現状とを見ながら、どこを何をというやっぱり体系的なメッセージがここにはなければならないと私は思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかの方でございませんか。

【濱田委員】　あまり言葉についていろいろ質問をすると、原案を書く人が書きにくくなると思って恐縮なんですけれども、「人間力」という言葉があって、これは「２１世紀ビジョン」で使われている言葉をそのまま使っていると思うんですが、やや抽象的なんですよね。資料２を見ると「人間力」の中身が書いてあるので、そのうちの何が北海道にとって問題なんだろうということを少し焦点を当てていったほうがいいんじゃないかと思います。というのは、「人間力」という言葉はまだあまり定着していないだろうという気がするので。

それから、その２行目に「地方の時代」というのがあるんですが、「地方の時代」というのは随分前に言われたんですけれども、私の認識では、今は地方が衰退していっている時代なので、これを書くのかなという気がしました。今日の新聞でも、地価の下落というのは地方で起きていて、地方の衰退は象徴的に起きているわけですから。「地方の時代」

は２０年ぐらい前に地方に明るい話として出てきたときのスローガンなので、わざわざこれを頭につけておくことはないのかなと思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかに何かございませんでしょうか。

【狩野委員】　先ほど家田先生に言われた概意はおっしゃられたことと近いんですけれども、道内にある会社というのは、一般的に支店なんですね。支店経営なんですよ。ですから、この「人間力を高める」ということに関係しますと、道内のできのいい人、よっぽどのエリートはまず東京へ行くのはいいとしましても、次ぐらいのできのいい人が北海道に残りたい、残ってどこか会社に行きたいというような環境をつくらなければいけない。それと「自立的安定」と言うときに、みんなが、全員が東京にばらばらに向いているのを、横ぐしを刺して道内である度合いといいますか、経済、そういうような工夫をしないといけない。だから、農業にしても、漁業にしても、そういったものが結局、昆布でもつくったものがみんな大阪へ行っちゃうよと。それは自分のところで加工して、それを北海道のブランドに、大阪のブランドを北海道のブランドにしてしまうというような意気込みが必要だと。私どもの製品について言えば、いかに室蘭から鉄を直接引いて、それを製品にして売り出す、そういったことをして北海道の人たちに、道民の人たちに自信を持っていただくということが非常に大事じゃないかと。これは、我々自身、がんばらなければいけないと思っているところですけれども、そういうふうに思いました。

【南山部会長】　ありがとうございました。

【櫻井委員】　今までのところで、先ほど家田先生が言われた「交流」という話があって、これは結局、「人口減少」のところと「グローバル化」のところと「自立的安定経済」のところで、いずれにしても交通手段といいましょうか、交流の手段というものの充実がかなめであるというんですか、大前提であるというような話があるんだと思うんです。

だから、その課題が非常に大きいということになりますと、ちょっとくくり方が１つ切り取ってやってもいいのかなという気もしまして、言葉としてはこの「自立的安定経済」のところに社会インフラの整備ですか、最後のところに社会資本等インフラ面において、どういう役割を国が果たすかみたいな話があって、そこに絡まってくるのかもしれませんけれども、そこをちょっと強調して書いてもいいのかなと思います。

それも、あとちょっと私、北海道がどうなっているのかよくわからないんですけれども、港湾の話とそれから空港関係はどういうふうになっているのかなというか、港政課長さん

はいらっしゃるんだけれども、空港はまた何か別の仕組みということになっているんですか。

【佐藤港政課長】　別の仕組みといいますと？

【櫻井委員】　どういうふうに整備、管理を国が関与しているのかがよくわからないのと、あと、交通手段としまして、まあ鉄道もあるし、バスもあるし、車もあるしということなので、その全体像としてどういうふうなイメージを持ったらいいかなということです。それが大事だということと、そこを教えていただけるとありがたいと思います。

【佐藤港政課長】　港湾とか空港とかいうのは正面に出てくるというよりも、大きな目的である農業の生産力を高めるだとか、あるいは国際的な物流の１つの重要なインフラ整備というような形で大きな北海道開発全体の維持の中を支えるインフラの１つとして、また、北海道及び日本全体が、島国で海に囲まれていますから、そういう意味では国際インフラとしての重要な要素が港湾と空港にそれぞれある。

それで、北海道開発としては、港湾は主に港湾管理者がやっています。残念ながら市町村が基盤でありますから、北海道全体としてどうあるべきかというところの部分は、大きな体系として北海道開発計画の中に掲げられますが、それぞれの役割が地域、各圏域の発展というようなちょっと小さくとらえられているところもありますね。

北海道全体での大きな国際インフラとしての港湾は苫小牧港を中心にやられている。空港は新千歳空港がまさに国際の大きな窓口になっています。旭川ですとか、釧路、函館、それぞれの空港も、北海道は非常に大きいものですから、九州でいえばそれぞれの県に１個１個空港があって、それぞれが地域の国際化の窓口になっているように、北海道全体の大きな拠点としては新千歳空港なんですが、道南でいけば函館空港、道東は釧路空港、道北は稚内空港、旭川空港とかがそれぞれ役割分担しながら圏域の交流を支えている。

そこのところで北海道開発局は、今のところ整備をやっています。北海道全体の航空行政をどうしていくかというのは日本全体のネットワークと結ばれて初めて生きるということで、航空局が航空政策全体の中でネットワークを考え、北海道はどういう位置づけでそのネットワークの中で生かしながら発展していこうかというようなことを考えています。

鉄道は、新幹線が主に中心になって、これも鉄道局が北海道とはまた別な視点で整備のことを考えているというようなところでございます。

【櫻井委員】　行政の横並びという点で言うと、今挙げられた局というのは、それぞれ大変問題が多いところだと認識していて、だから、北海道プロパーでこれは大事だという

ことは出していったほうがいいと思いますね。

特に、港湾などは港湾法そのものが大変な欠陥法律なので、あれは占領政策としてできた法律です。もう少し広域的な観点で港湾管理ができなければいけないし、それから、漁港なども同じことだと思います。航空は航空で言わずもがなという感じがございまして、ですので、そこら辺は北海道局として別に言って言えないことはないはずですね。建設的なことを提示するわけですので、それはひいては国益になるのだという話になるはずですので、もし書けるのであれば、ぜひ切り出していただいて大きくばんと出していただければと思いますけれども。

そんなところです。

【吉田北海道局長】　今の港湾とか空港の話ですけれども、北米とアジアを結ぶ国際航路ですね、これが北海道沖、釧路とか苫小牧を通って、津軽海峡を通って日本海を抜けて中国へ行っているんですね。そういう大きなルートが苫小牧とか釧路のすぐそばを通っているということですし、空のほうも、日本の中で一番北米とかヨーロッパに近いのが北海道です。やはりそういうポテンシャルをどういうふうに生かしていくかということは、先生ご指摘のように非常に大事な話だと思っていますので。

【南山部会長】　それでは、また大変恐縮ですが、次の課題の「安全・安心な国土」、これのこういう観点からの認識について御意見とか皆さんのお考えをお聞かせ願いますか。ほかのところと関係するようなところもちょっとございますけれども。

【北委員】　私の冒頭に言ったことの１つの中で、地域が果たす役目というものを、女性の出生率のデータを含めて前にもお話ししました。ですから、そういう意味で、先ほどからずっと話が出ていることでございますけれども、やはり都市と農村の交流ということをきちっと位置づけてやる。私どもの中空知でも、これについては都市と交流をずっと継続的に七、八年続けてやっておりますけれども、都市の学生がホームステイをして、その中で自然との触れ合いの喜び、動物との触れ合いの喜び、こういった中でずっと今でも継続して、それからおつき合いが続いているということは、やはり地方の魅力であり、また、地方も都市を理解し合うという、その交流の大切さというものを感じます。

ですから、人口減少状況だとか、あるいは過疎化の中で、やはりこれから脚光を浴びるのは、従来型の観光も大切ですが、農業ならホームステイしていただきながら、そこでいわば植物の成長だとか、動物の成長だとか、いろいろな面で生産というものの大切さ、そして、その中で自然のはぐくみ、命の大切さは自然に伝わっていくということが交流の大

切さだと。ですから、ヨーロッパもそうでございます。デンマークやスウェーデンでも農業をやりながら、やはり森林もきちんと整備し、まさに絵にかいたような環境を整備しながら交流を行っている。こういったやはり交流を北海道として進めていく必要があるのではないか。これがまさにこれからの観光でないか、こういうふうに思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

「安全・安心な国土」ということで、ここにはどちらかというとセキュリティー的な要素、あるいは災害等の関係がありますけれども、こういったことについてもやはりいろいろと御意見いただければと思います。

【家田委員】　「安全・安心」ですよね。ちょっとわからなかったのがこの２段落目で、「北海道は、ロシア極東地域に接し、積雪寒冷で」とつながるのが、ロシアに近いから雪が多いと言いたいのか、ロシアは危ないねということを言いつつ、もう一つ、雪もねという、そういうちょっと、これだとわからないなという感じですね。

それから、津波が出てこないんですよね。津波の重大の地域ですし、函館から襟裳を通って釧路、浜中というあのラインは何でしたっけ、もうしばらくで来ちゃう予定になっているわけですよね。それは言及されていないなという感じがしました。

以上、２点です。

【南山部会長】　はい。それでは、順番に。

【佐藤企画調整官】　ロシア極東地域に接しているというところです。先生ご指摘のとおり、若干、書き手として丸くしてしまったためにわかりにくくなったところと、それから、非常に書きづらくて悩んでいたというところがございます。やはりロシア極東地域は、ビジネスに関しましても、通常の資本主義のルールが適用されにくいといいますか、北海道で対応する中でも非常に難しい地域である。あるいは、老朽化した漁船が相当来ているというようないろいろな課題を抱えたところであります。それから、資源開発にいたしましても、サハリン州北部での石油開発が一たん事故になったときにちょうど流氷が流れるのと同じルートで大量の原油が流れついてしまうというような問題がありまして、いろいろな課題がこのロシア極東地域に接しているところで発生しているだろうということでこの一文を入れています。積雪寒冷とは分けてますが、ただ、何分そういうものを今どういう形でストレートに表現し得るかというところで少し筆が悩んでしまいまして、若干表現が丸くなってますけれども、そういう意図で記述しています。

【家田委員】　ちょっとコメントすると、もしそういう意図であるなら、この「安全・

安心」というところでずばっとロシアと言っちゃうよりは、さっきの「グローバル」のところで触れるほうが前向きに見えるかなという感じはしますね。

あとは、どこで言ったらいいのかよくわからないでいるんだけれども、サハリンとかあっちのガス、天然ガスのパイプラインとか、ああいうのは全然いいんですかね、これは。「エネルギー」のところで言うことなのか、それとも「グローバル」で言うことなのか、そういうセキュリティーのうちですよね、ああいうのもね。ヒューエル・セキュリティーというか、そういうところで言うのか、ちょっとわからないので、持ち出し場所がどうだったんですかね。どんな考えですかね。

【鈴木参事官】　　実は「エネルギー」のところで、あのような大きなエネルギーがすぐ稚内のすぐ向こう側にあるということで、これはいろいろ使っていくことが考えられるということで入れようかどうかということは検討したのですが、今の段階では、率直になかなか書けないという部分がありまして、触れてはいないんですけれども、その辺についても、書き方、入れ込み方については検討していきたいと思います。非常に大事な問題だとは思っております。

【家田委員】　　きちんとした連携と協力を前提とした上で重要な資源が隣にあるということですよね。

【鈴木参事官】　　ええ。それと、稚内を中心にかなりロジスティックというか、サポートをする動きもだいぶありますので、それもあわせて触れることも必要かなとは思っております。

【家田委員】　　ちょっとご検討いただけませんかね。南の中国とのあそこのところが、もう手も足も出ないような状況になっちゃっているので、こっちで次のしくじりはしたくないですものね、日本として。

【鈴木参事官】　　はい。検討したいと思います。

【南山部会長】　　ほかにございますか。

【川島委員】　　「安全・安心な国土」ということで言うと、当然のことながら日本全体がこの枠の中に入っていなければいけないという話だと思うんですが、北海道開発の意義という中でこれを挙げておられるということは、北海道の独特の、または北海道が全国に代表してというような特徴をやはりここで出すべきなんだろうと。

そういう中で言うと、１つは火山の問題が結構、北海道では洞爺湖の有珠山がつい１０年ぐらい前ですかありましたので、ああいったのはほかの事例へといいますか、先進的な

取り組みということで役立てられるでしょうし、あと、特に北海道の特徴は、人が分散して住んでいるので、例えば遠隔医療であるとか、そういったものの対象を特に重点的にやるというような、そういった観点での取り組みもここに入れられるとよいのではないかと思います。

【北委員】　今言われたのは非常に大事なことだと思います。町をめぐる環境は、まさに医療不足で医師不足で、今お話がありましたように、どうこれを重点化しながら集約化しながら、そして地域が安全で安心で住める、住むということも非常に大切、基本でございますから、そういったことも含めながら考えていかなければいけないことでないかなと、こう思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

【狩野委員】　もう１つ、一言あります。いろいろロシアも極東もそうですし、積雪寒冷とか、それから災害が多発するとか、これは非常に丸くしたと言うんですけれども、やはり以前もありましたけれども、北海道って２２％の国土がありますよね。広いですから、もう５分の１、あるいは４分の１と言ってもいいような地域だから、「災害が多発する」というのは、そういう面積で比較したらほんとうに多発すると言っていいのか。部分的にはそうかもしれないけれども、実際はそうでもないよと。積雪寒冷も、積雪の多いところと、雪はないけれども、ただ寒いよというところもありますし、そういう意味で、これはやはり一言で北海道をくくるというのも大変難しいのではないかなと思いました。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかにございませんか。

【小磯委員】　最初に、さっき港湾の、港の話が出ていましたので一言。

私のところの、例えば釧路港という港、２年ほど前ですかね、いろいろ調査してみたら、今の釧路港が担っている、例えば農業生産における役割みたいなものを見ますと、北海道における飼料・肥料のもう半分近くが釧路港を出入りして、釧路はもとより道東だけではなくて、かなり広範な地域の農業生産を担っているということが分かった。ところが、先ほど櫻井先生がおっしゃったように、その港湾を管理している仕組みは釧路市という一地方自治体がこれだけの厳しい地方財政環境の中でそれを維持していかなくてはならないという、いわばほんとうにそのインフラが支えている受益の地域と実際それを支えていく負担の地域との関係仕組みそのものが、今、少し乖離してきているという、やっぱりそういう制度の問題などもあわせてしっかり議論していくことが私も大事ではないかと感じてお

りましたので、一言申し上げます。

それで今の論点のところで、実は「安全・安心な国土」というところの話なんですが、実はお話ししたいのは、「人口減少」あるいは「自然環境」すべてにわたる部分なんです。どういうポイントかといいますと、「安全・安心な国土」の中でいわゆる「暮らし易いコミュニティ」という部分がございます。これを資料４の中で見ると、かなり書き砕いておられて、自助、公助、共助が行われる地域社会をどう形成していくのか、活力あるコミュニティという、実はやっぱり災害・防災という、そういう時点において地域の中の横の連携、やっぱりコミュニティとしての大切さみたいなところが出てくると思うんですが、実はこれの論点というのは、北海道にとって非常に私は大事なところだと最近思っているんです。

というのは、北海道の医療費は、結構１人当たりの負担が大きい。それから生活保護、これもほかの地方部に比べると、北海道は大変割合が高い。特に釧路地域は大変多いということで、実は今、厚生労働省の調査を私の研究センターで今やっているんですけれども、そういうのを見ていきますと、もちろん地域経済の厳しさがあるんですが、やっぱりそこの要因は、いろいろな意味でのコミュニティとしての近隣のつき合いの希薄さや、ある意味では、公的扶助というものに頼ることのためらいのなさといいますか、いろいろなやっぱりそういう部分があって、実はこれは政府としての行政サービスをどう展開していくかということと地域社会のかかわりの中で北海道の中では非常に大事な部分なんですね。特にそれを今支えている財政基盤がだんだん弱くなってきた中で、したがって、そういうものをしっかりした地域社会として構築していくという視点。これは、私は「安全・安心」というこの部分だけではなくて、例えば先ほどの中で「人口減少」というのがありましたね。それで人口減少の問題は、私などはまあこれから急速な人口減少、高齢化でどうしていくかというよりも、例えば道東地域などを見ますと、ほんとうに広い中で人が希薄なところでどうやって生活していけばいいのかってもう既に経験してきているわけで、やっぱりそういう意味での１つの地域社会構成のモデルにしていく。そういう意味でモビリティーの問題とかいろいろあるんですけれども、その中でやっぱり力強い地域社会をどう形成していくかというものを、ただ「安全・安心」というそういう領域だけではなくて、やっぱり目指すところは雇用創出であり、産業創出であり、地域が発展していく、生き抜いていくための地域社会の中でやっぱりそういう力をどう生み出していくかというところでとらえていくべきだと私は思っているんです。

そういう目で見ると、例えば「人口減少」のところにも書いてありますけれども、農業生産、自然環境とか、こういうところが北海道にとっての重要な役割だという部分があるのですが、例えば今、道東地域なんか、自然の保護とか自然管理という、そういう団体だとか、いろいろな活動は大変盛んなんですけれども、そういう取り組みが、今、一次産業、農業とか、漁業とか、そういうところと、今、次第に結びついてきて、何とかやっぱり自分たちの地域の自然環境資源というものを有効に地域の発展に結びつけていこうというような、そういう動きが、今、出てきています。

例えば、家田先生がこの間来られた浜中町、あそこでは「霧多布湿原トラスト」という、もともとは「ナショナルトラスト」という自然保護の運動だったんですが、今は彼らが目指しているのは雇用創出です。いかに地元の農業者、それから漁業者、実は農業者、漁業者もいわば自然管理の担い手としては非常に大事なんですよね。何かやっぱり自然を愛する方たちと実は共鳴する部分がある。そこで新しい産業、付加価値を興して、自分たちで雇用創出をしていこうという、実はそういう北海道特有の自然環境資源の担い手である地域社会の中でそういう取り組みが今出てきている。、これをやっぱりしっかり政策としてサポートしていく。ここにはもう政府資金はほとんど入っていません。そこに対して政策としてどういうサポートができるのかというのは、これから非常に大事なテーマだと思います。

それから、例えば関連して言えば、「自然環境」のところでも、循環型経済社会の方向性がうたわれていますけれども、例えば、今、私が標茶でやっている、これは環境リサイクル系のベンチャー企業ですけれども、地元の廃棄物を新しい資源にして生産品をつくっているのですが、実は地域の廃棄物をしっかり資源にするというのは大変なことなんです。どこがどういう廃棄物を出しているかという地域情報をしっかり把握しなければ、危険な廃棄物は使えないわけですから。そういう意味では、やっぱり地域社会との連携、そういうやっぱり密接なかかわりの中で実は質の高い廃棄物というものが入手できるという、そういう状況もあります。

例えば今、我々は、廃プラスチックなどを使っているんですけれども、質のいいものがなかなかない。最近はペットボトルのキャップ、これは非常にプラスチックとしては質の高いものですけれども、これは今、全部廃棄物として再利用されていないんですね。それを今、我々の地域社会の中ではこれを集めようということで、これは小学校単位とか、町内会単位で、それで我々の会社に持ってきてくれるという、そういう動きも今は出てきて

います。

　ここには、ほんとうに民間企業が地域社会との連携の中で新しい産業創出をし、雇用創出をし、ここに政府資金なんかは一切入っていません。でも、やっぱりそういう動きがあるわけですね。そういうものはきっちり着目してやっぱりサポートしていくような仕組みづくり・システムづくりがこれからの地域社会にとって私は大事なことではないかと。「安全・安心」という項目だけの話ではないんですけれども、地域社会のコミュニティというもの、これが北海道にとっては、私は一つ大きなこれからの課題だと思っているものですから、あえて申し上げました。

　以上です。

【南山部会長】　　それでは、大変恐縮ですが、また次の課題で、北海道内の圏域が国土の２０％以上を占めている面積の中での歴史的な状況も踏まえて、現実に圏域が幾つかあると。そういったものに着目して道の果たすべき機能を検討していくか、いろいろな見方、これは北海道にとってがそうであるように、圏域それぞれについても、またいろいろな考え方もあると思いますし、また、そういうものを展望していかに北海道という姿をつくっていくかという観点からの御意見もあろうかと思いますけれども、これについていろいろ御意見いただければと思います。

【濱田委員】　　この部分は、事前に送っていただいた補足メモにはなくて、今日つけ加わった部分なんですよね。それで、最後の４行なんですが、私はこういうふうに圏域を分けるということに賛成です。例えば、道央だとか、道北だとか、十勝だとか、旭川だとかというふうに分けていくと、なかなか話は難しいので、状況の違いによって何層かに話を分けて議論するのはなかなか新しい見方で、これはよろしいのではないかと思いました。こういう圏域の分け方のほうが、予算的にも少なくて済む、そういう工夫になっているような気がしました。

　以上です。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

　圏域についてはいろいろお考えの方があると思うんですけれども、御意見ほかにありませんか。

　どうぞお願いします。

【狩野委員】　　全く、これはぜひ強調していただきたいのでありまして、本州の人たちが北海道と言ったときのイメージが積雪寒冷だとか、ロシアに続いているとか、災害があ

るとか、そういうふうにもう大きく、それこそ丸められた表現になっているということなんでありまして、道東や、道央や、あるいは函館地域であるとか、日本海側であると、太平洋側の違いであるとか、そういう違いを本州の人にわかっていただく。そうすれば、本州の人にももっと北海道へビジネスで来てくれる。観光でももちろん来てくれるだろうし、そうしたときに、どこへ行けば何があるのかというような特徴を、それは道として宣伝しなければいけないということになると思いますが、ぜひこういう違いをわかっていただきたい、本州の方々にですね、それは強く思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかにどうですか。

【吉田北海道局長】　小磯先生、先ほどから道東の話をいろいろしていただいていますけれども、ここで圏域を３つに分けています。道東のほうはこの真ん中の「農・水産業を中心に付加価値の高い生産活動が行われつつ人口減少・少子高齢化が進む圏域」と、こういうイメージかなと思うんですが、小磯先生から何かコメントいただければと思うんですけれども。

【小磯委員】　圏域については、私、前回、ちょっとご意見申し上げまして、戦後の各北海道総合開発計画の中でいろいろな圏域、線引きをして、結果的にそれがどういう効果があり、どこが問題であったのかという、やっぱり検証の上で議論をすべきだと。要は、やはり幾ら線引きをしたとしても、それによって何をするのかという具体的な施策の手法の効果というものを見極めないと、やっぱりただ線引きの議論だけしていてもなかなかうまくいかないと思います。

それで、今、局長からご質問があった道東地域そのものは、やはりある程度農業生産力、で、今はばらつきはありますけれども、結構勢いのある部分もあって、それで１つの産業としての牽引力を果たしながら、いろいろな人口減少・高齢化の課題などに対峙しながらも生き抜いていく、そういう地域としての位置づけはあると思います。

ただ問題は、比較的今回、この最後の段落で示された考え方は、その地域の産業条件、あるいはその産業面を中心にした発展段階、そういうところで同じ質のところを少しグルーピングしてという考え方で、これは実はあれは第４期計画ですね。そこで総合環境圏という、北海道を１９圏域に分け、４段階の同質地域に分けて、それで政策展開していこうという、その過去の経験があるわけですね。その経験がどうだったのかという、そこの見極めが大切です。で、特に北海道と圏域との連携という問題、これもこれから地方分権な

り今の道州制の議論なりを含めての意味での有機的な連携というものが一方でなければならないので、ただ国の政策だけではなくて、それと連携した、連動した北海道としての自治体政策というものもある程度想定した圏域ということでの政策効果というものを見極めていくという視点が私は大事ではないかと思います。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ほかにどなたか。

【家田委員】　今の圏域のところと、それから、それに関連してモビリティー関係の話を申し上げようと思うんですけれども、まずこの「圏域」に書いてあるところが、最初のほうには6個の圏域、6期計画では。その6個の圏域なのかなというとそうじゃなくて、最後には3種類ということですよね、これ。3種類、それぞれに何か幾つか場所があるかもしれないけれども。

それで、その何のために圏域を設定するのかというのがはっきりした上で、その目的のミッション、このミッションのためのこの圏域というふうにしないと、ちょっと違って誤解されるところがあって、狩野さんがおっしゃるような意味の北海道の対外マーケティングとしての意味から言ったら、やっぱり観光上の同一性、文化、自然社会的な同一性の中でくくるという、多分、機構風土も違いますよね。そうだけれども、ここで言っているのは、いわば政策上の何を重点を置くべきかが違うので分けましょうというところなので、多分、分け方は違うと思いますね。それをちょっと整理した上でやられたほうがいいとは思っております。

それから、圏域を越えるときに特に重要、あるいは圏域をでかく切る場合には、その中での移動で重要になるんだけれども、北海道では積雪寒冷かというと、積雪・寒冷でもいいんですけれども、いずれにしても冬が非常にきつい条件であることは間違いない。そして、人口密度がほかの地域よりも既に十分低い状態であります。、本州のほかのところでは高速道路・アンド・一般道で行っているわけですよ、どこでも。高速道路を引くところに一般道がないわけじゃないですね。だけれども、北海道では必ずしもアンドでいくんじゃなくて、その中くらいの地域高規格みたいなものでいったり、要するにどっちにも役立つようないい道路のネットワークにしましょうねという選択肢になりますよね。人口密度が低いですから、アンドでいきませんからね。

ところが現実はというところ、本州と同じ運用になっていて、いざ雪だ、いろいろな条件が悪くなるというと、高速道路が先にとまるわけです。だから一般道で、非常に条件の

悪い一般道で行くことになるんですね。ということは、こういう気候条件が苦しいところは冬にものすごいハンディになるんですよね。

ところが、決していい兆しがないわけじゃなくて、この間、稚内にお邪魔したときに、道路の名前は忘れちゃったけれども、豊富とかあの辺なんですけれども、有料じゃなくて無料の自動車専用道路で、これは多分無料だからこそやっていただいているんだと思うんですが、非常に豪雪の中でもかなり無理しても通行できるように維持してくれていて、スピードこそそんなにべらぼうに飛ばすわけにはいかないけれども、まあ５０キロぐらいでは何とか行けるんですね。この姿で道路を運用することによって冬にも役立つハイクラスの道路と。それを北海道の標準にしながらネットワークをつないでいきますと。しかも、日勝峠に代表されるような非常に苦しい条件のところから優先的にきちんとやっていきますというのがこの「安全・安心」、あるいは多様性を有するこの圏域をつなぐというところで、やっぱり１項目おこしていいのではないかと私は思っています。積雪・寒冷、それから、人口密度の低いがゆえにこうですよという、そして、こういう工夫をしますよというセットでですね。それが１つです。

もう１点は、小磯先生が大変に将来に向けて期待できるお話をされたので、私も大変に感銘を受けて――いつも感銘を受けているんですけれども、そういうのがなぜ生きるかなというので、冒頭申し上げたオープンな社会性と、それに基づく広域でしかもいろいろ分野の違う人の交流が実現できるからＮＰＯをやったりとか、おもしろいことをやるという、割合元気なんですよね。もちろん、どれも小規模ですけれども、小規模のものが、質がよければいろいろな人がうんと集まってきますからね。

申し上げたいのは、社会的なオープン性と、それに基づくこのいろいろな種類の交流、つまりハイブリッドな交流が、さっき小磯先生がおっしゃったような地域の細かいけれども非常に質の高い活動を促す。それからもう一方の流れは、同時におもしろい観光、質の高いおもしろい観光を生み出すという文脈をなるべく明示的に出したほうが北海道らしさが出ると思いました。

以上です。

【南山部会長】　ありがとうございました。

「圏域」についてはどうでしょうか。

【山本（博）委員】　今回の御提案の３つの圏域の考え方、基本的に賛成いたします。ただ、ちょっとした言葉遣いの問題で気になることがあるのは、「原生的な」という表現

について、ちょっときついといいますか、限定的になってしまうおそれがあるのではないかという危惧を持ちます。そこで、その集落の維持が困難なというか、そこで人々がある程度暮らしを立てるということを前提にするならば、観光業とかそういうものが考えられるわけですけれども、北海道の中でいろいろな自然があって、豊富な自然がある。それを魅力として暮らしを立てるということは可能だと思いますが、必ずしも「原生的な」という言葉まで縛りをかけなくても、もうちょっと広い意味の自然が豊富であるという理解でもよろしいのではないかと、そのように感じました。

【南山部会長】　そうですね、確かにそのとおりで、まさに実際にも原生的かもわかりませんけれども、原生そのものはもうほとんどありませんから。ありがとうございました。

【櫻井委員】　先ほど申し上げたことと関係しているんですけれども、「圏域」の話と、それから最初の項目の「人口減少・高齢化」のところなんですけれども、これはちょっと項目の立て方がややミスリーディングで、少子高齢化の話に言及したいという気持ちはよくわかって、何かしら書かれるのは問題ないと思うんですけれども、だから出生率を上げろとかそういう話じゃないんですよね。

だから、ここで書かれていることは、私の理解では一種の土地利用の話とモビリティーの話ということで、土地絡みなんですよね、いずれにしましても。ということで、都市計画の話とか、都市機能の集中みたいなことを申し上げたんですが、そのことと、この圏域の関係ですね。そこがどういう形でつながってくるのかというところをお伺いしたいのと、多分、その圏域ごとにそれぞれまた考えるということになるんでしょうけれども、その最初の標題のつけ方の問題と、その両者の関係について少し整理をされるといいのではないかと思います。

【鈴木参事官】　おっしゃるように、この６つのテーマがありますけれども、この６つのうち、最初の４つはまさに我が国の課題解決のためというような部分であります。それから、「安全・安心」というのは、先ほどもちょっと触れましたけれども、これはもう国の責務としての部分がかなり強いという部分。また各圏域の議論というのは、これは全くそれとは別で、そういった問題とか課題解決のためにいろいろなことを貢献するために各圏域がどうあるべきかというような部分で、おっしゃるように並んでいるわけじゃない部分があります。それは、リードの仕方がまずいという部分は認識はしておりますけれども、その辺をどうやって整理していくかという部分がまだ残っております。ですから、各圏域にも、人口問題とか、そういったような問題は残っているわけです。

それと、北海道開発の意義と考えますと、北海道の役割を果たすときに、それぞれの特徴ある圏域がどんな姿が望ましいんだろうかということをできるだけ出して、それに向けて開発施策としてどういう施策が打っていけるんだろうかという部分で、当然、人口問題とか、あるいはグローバル化とか、自立的発展という部分がかなり出てくると思いますけれども、そういった部分で縦の問題提起と横の問題提起が一緒になっている部分がありますので、そこはまたこれから整理していきたいと思います。

【藤塚審議官】　いろいろ御議論いただいていますけれども、「人口減少・高齢化」、「自然環境、エネルギー」、「グローバル化」。これらは要するに新たな時代の潮流として、その中で北海道開発の意義をどう考えていくのかという視点で整理したものです。こういう時代の潮流の中で、何が重要になってきているか、どこに焦点を当てていったらいいかということを御議論いただいて問題を抽出していく。それから、「自立的安定経済への移行」、「安全・安心な国土」。これらはそういう国家的課題を解決していく上で北海道が貢献していくための基本的なベースになるものとして整理したものです。例えば「安全・安心」は産業基盤、ライフライン、その生活基盤、すべての前提であります。また、観光で人が来るにしても、安全なところでなければ、なかなか魅力を感じないとか、そういうベースとなるものでございます。

それから、「圏域」と最初の「人口減少」。これは、御指摘のとおり密接に関連する問題でありまして、ここはこういう形で分けてありますけれども、あわせて御議論いただければ大変ありがたい点だと思っております。

ここで御議論いただいた重要な点、先ほど櫻井委員から御指摘いただきましたけれども、例えば「交流」というのはいろいろなところに出てまいります。それから、「食」の話もいろいろなところに出てきます。そういうものを次回以降お示ししますスケルトンとかそういう中で、どういう形で今までのいろいろな御意見を集約して先鋭的に出していくかということをまた検討していきたいと考えております。

【南山部会長】　ありがとうございました。

ここまでで一応６つの課題についてきたわけですけれども、初めに戻りましてというか、全体を通じましてご意見をひとつ。

【濱田委員】　総論のところでちょっと補足しておきたいと思います。

「開発」という言葉をどう理解するかということをちょっとこだわっているんじゃないのという話だったんですが、２つあります。１つは、行財政改革の次のターゲットに北海

道開発ということがもう挙げられているわけですよね。私の目には、あそこに何で北海道開発が挙がってしまったのというのがいまだによくわからないところもあるんですが、その背景には、やっぱり「北海道開発」と言ったときの「開発」という言葉に対する非常に単純な理解があったのではないかと思っています。ですから、「開発」ということをどういうふうに理解しているのかということは言っておいたほうがいいだろうと。

それからもう一つ。ここも北海道開発分科会の部会なんですけれども、やはり「北海道開発」は、この会議の看板、キーワードなんだろうと思っております。看板に書いてある言葉にちょっと誤解があるということであれば、それに一定の注釈を述べておくと。その場所として、報告書の総論の部分、一番最初の部分はふさわしいのではなかろうかと考えております。

以上です。

【南山部会長】　ありがとうございました。

それでは、北委員、お願いします。

【北委員】　全体を通してということでございますが、先の３つの圏域とも関連ありますけれども、やはりはっきり言いますと、今、国の果たす役目、あわせて地方が果たす役目、こういった役割分担をどうしなければいけないか。もちろん「安全・安心」ということもありますし、あらゆる面でこの役目を明確にして、国民全体が地方分権を理解していく必要があるのではないか。それは、地方にとってみても、分権はどこまでどういうものをしなければいけないか。分権そのものが、先ほどの小磯先生がお話しありましたけれども、その中で地域住民がどういうことに主体を持ってやっていけるのかと。そのためには財源と権限をどういうふうにしてセットで移行して、その自主性と自律性を高めていくか。こういったことも含めながら国土交通省の北海道開発局の役割分担というものがその中にも出てくる。先ほどありましたように、自主的な仕事に政策的なサポートがないという、これがほんとうにだれがどういう役目をしなければいけないか、国が、あるいは北海道庁が、あるいは市町村がどんな役目を果たしながら、そして連携をし合いながら、そして最終的には民の活力をどう果たしていくかということも含めながら、この分権の在り方ということも避けて通れない時代でないかな。これをやっぱり明確にしなければ、はっきり言いますと道民もさることながら、開発局の職員も不安に耐えないと思いますよ。だから、そういったことも含めながら、やはり全国民的な合意を得るための分権をどういうふうにしていくかということを、やはり避けようとしたってできないと、私はそう思っておりま

すから、そういう意味での地方自治がどうあるべきか、あるいは主体的、自律的に地方運営をどうしていかなければいけないかということも非常に貴重なことでないかなと思います。

【南山部会長】　どうもありがとうございます。

【鈴木参事官】　今、北委員のおっしゃったことはまさにそのとおりでありまして、私たちも悩んでいるのは、こういったような各課題解決のために北海道のやるべきことというときに、国としてどこまでやるべきか、それから、地方の役割としてどこまでかということを、それをかなり、なかなか明確にできない部分もあるんですけれども、それを計画の中でも明らかにしていきながら、やはり背景には、それだけ国の計画として北海道総合開発計画があり、どのように事業を進めるかというようなこともありますから、まさに今おっしゃったようなことが一番私たちもいろいろ相談していきたい部分であります。ありがとうございます。

【南山部会長】　それでは、北海道の東京事務所の稲垣所長、もし何かご意見ありましたら。

【稲垣所長】　ありがとうございます。全体に大変よくまとまっているとは思っております。

ただ、ちょっと、先ほどの議論も聞いていまして１点だけ気になったのは、やはり圏域の問題です。３種類の圏域について書かれているわけですが、ここで書かれている「原生的な自然が豊富ではあるが集落の維持が困難な圏域」等々というその圏域のイメージが、やはりちょっとよくわからないなという印象を持っています。

従来、圏域をとらえるときに、やはり地域が一体となって発展するための広域的な枠組みというとらえ方だったんだろうと思うんですが、ここで書かれている圏域は、もっと小さい、狭い地域エリアのことなのか、あるいは地域構造を指しているのか、従来の圏域というものとどういうかかわりになってくるのかというあたり、もう少し議論をしていく必要があるのかなという感じがいたしました。

以上です。

【吉田北海道局長】　ここで３つの圏域に分けた意味は、こう分けることによって、政策に差をつけるという意味、そういう気持ちがあってこう分けているんです。

例えば「自然が豊富であるが集落の維持が困難な圏域」、先ほど漁業とか農業をしている方々が一番自然を守っているというお話もありましたけれども、ではそういうようなと

ころでは、国として、あるいは北海道としてということはあると思うんですけれども、どういう政索をしていったらいいのか。それから、人口減少とか高齢化が進んでいるけれども、付加価値が高い、地域経済としてはしっかりしている、そういうところではどういうふうな政策を打っていくかです。

それから、都市圏域。従来の６圏域というのは、どうも都市圏域で分けていました。札幌、函館、旭川、帯広、釧路、網走、北見。そういうところはどうするか。結果としては、この３つの組み合わせで６圏域というふうにまたなるのかもしれませんけれども、旭川圏域１つをとらえるよりは、やっぱりそれぞれ、こういうところについてどういうふうな施策を打っていくかというのは、１回議論したほうがいいんじゃないかなと思っているんです。

【稲垣所長】　　問題意識は、非常によくわかります。ますますこれから人口が減っていく中で、地域社会をどうしていくのかということだと思います。

ただ、従来、６圏域の考え方は、周辺の農山漁村を含めて地域が発展するために、やはり都市の機能をうまく利用しながら周辺のよさを生かしていこうと、そのために交通体系をどうしていくかだとか、情報システムをどうしていくかだとか、そういう議論だったんだと思うんですよね。先ほど小磯先生がおっしゃったように、コミュニティをどうしていくかという議論も非常に大きな課題でありますし、例えば人口が減少していくところで地域を将来どうしていくのかといったときに、やはりもう一遍都市の議論だとか、核となる地域とのかかわりの議論だとかが必要という気がしているものですから。いずれにしても、やはり圏域の問題はこれから非常に重要だと思っております。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

【家田委員】　　今の圏域の議論で、今おっしゃられたことに関係もするので申し上げるんですけれども、圏域が、その圏域を決めて、その中でのある種の自力的な機能を求めるときの分けと、そうじゃなくて何かこの手を打ちます、あの手を打ちますというときの色分けとは違うんですよね。それがはっきりしないで書くから、今のような疑問が出るんだと思いますよ。さっき申し上げたこともそれに類します。

ちょっと１点だけ質問していいですかね。

資料４－２に書いてあることにちょっと気になるところがあって、資料４－１と関連しているので聞くんですけれども、資料４－２で２ページを見ますと、下のほうに２というのがあって、１）の手前に２行入っていますが、「さらに時代の潮流の変化に伴い我が国

が直面する基本的問題の解決に、大きな役割を果たす」のだと、こういうスタンスなんですよね。それがゆえに「先駆的な役割」とか、そういう表現になっている。

これの考えを詰めていきますと、結局、我が国はどこも同じような課題なんだと。だけれども、北海道も、それは北海道もその一員であって、それを先駆的にやるんだと。モデルです、だから国でしょと、そういう論理だと思うんだけれども、少なくとも現時点で言えば国土形成計画がカバーするエリアと北海道開発のカバーするエリアは一応切れているわけですし、私は広いほうのエリアのほうもやっているものですから、そっちをやるときには、今、ここに書いてあるようなことを言いたくなるんですけれども、この北海道局がやる開発計画としてだと、何も全国同じようなユニバーサリティーの中でこの仕事をやっているという位置づけ、それがないほうがいいとは言いませんよ、一部あってもいいんだけれども、そればかりよりは、北海道というところの独自性のところから北海道のためにやるんだと。その「北海道のため」は、日本のためにももちろんなるんだと。しかも、北海道の独自性というと、これは独自性というよりは特徴の１つは、人口密度が日本の中で格段に低いことですよね。世界中で人口の密度の低い、しかも気候の悪いところを勝手にその地域だけで好きにやってねという国はどこにもないんですね。国がテイクケアするんです、必ず。だからこそさっき申し上げたような食料で非常にいい資質を持っていて、人口が減る中で統合もされているんだけれども、地理的にはぱらぱらぱらとモザイクみたいになっている。これをかなり大規模な区画整理などやろうと思えば、当然、国が支援しない限りそう簡単に進まないですよね。だけれども、人口はもっともっと減っていく中で、いつ何どき北海道だって歯抜けになっちゃうかわからない。さらに今こそ力を入れるべきでしょう、というようなことになると、当然、国は支援せざるを得ないですから、ここで申し上げたいのは、ユニバーサリティーの中で北海道が一番前にいて課題の解決しますよじゃなくて、北海道独自の課題があって、しかし、その課題は、北海道独自のよさ、それから可能性の中で結構光り輝いているエリアなんだよというふうにとらえたほうが、この北海道総合開発計画の意味が国民的におもしろいのではないかなと思いまして、ちょっとあまりにも「先駆的」とか、我が国が直面する課題のためにやっているんだみたいなところが強過ぎないかなという感じを持ったんですけれども、どんな感じでしょうかね。

【鈴木参事官】　ここの部分は、非常に悩んだ部分ではありますけれども、１つは、今言ったような地域社会のモデルを先駆的にという部分。もう一つは、北海道の食料の供給というような役割を考えたときに、そういった農山漁村のコミュニティの崩壊してその役

割が果たせなくなることは避けなければならないという部分で、国として食料を確保するという意味でコミュニティを保っていくんだと、こういうような位置づけと２つありまして、むしろ国としてはそっちのほうの意味が大きいんじゃないだろうか。そういう中での議論がありまして、ちょっとこんな中途半端な書きぶりになっています。

【家田委員】　今おっしゃったのだったら僕と似ているんですけれども、ここに書いてあることは、どこでも起こることの最初にやるのもうちだよと言っているようにしか見えないんだけれどもね。

【鈴木参事官】　はい、その部分はおそらく北海道庁のほうでいろいろ考えておられることとかなりラップする部分もあるんじゃないかと思いますけれども。どっちかというともう一つのテーマのほうが国の施策としてはちょっと大事なんじゃないかなと。

【家田委員】　どこでも同じことの課題のところを解決するのが？

【鈴木参事官】　いや、そうではなくて、食料の自給率を保っていく、高めていくために、北海道のコミュニティを保つという部分が。

【家田委員】　まあコミュニティはいいんだけれども、それは各論だから。そうじゃなくて、北海道の独自性、我が国の中での独自性のところに着目して開発計画を立てるという意味ですね。

【鈴木参事官】　という意味です。

【家田委員】　それじゃ私と同じ意見だ。ありがとうございました。

【南山部会長】　ありがとうございました。

【吉田北海道局長】　これを書いた気持ちとしては、今、家田先生が疑問だとおっしゃった部分も、やはりあるのです。

【家田委員】　そうですか。

【吉田北海道局長】　ええ。これから日本全国、２１世紀を迎えて人口減少、そして高齢化によってやっぱり集落が崩壊していくような地域が出てくるんじゃないかと。そのときに、今、北海道で取り組んでいることが日本全体にとって先駆的なものとなるんじゃないかという気持ちももちろんあってこれは書いています。それを２１世紀の北海道開発の課題としてとらえるかどうかについては、もう少しまた皆さんの意見を伺いたいと思います。

【家田委員】　もちろん僕もそれはいいと思うんですよ。だけれども、それだけが前面に出るんじゃいかがなものかという意味です。

【吉田北海道局長】　　はい、わかりました。

【南山部会長】　　大変、非常に基本的な御意見をたくさんいただきました。

では、札幌からおいでの秋元企画部長、御意見いただきたいと思います。

【秋元企画部長】　　今日は委員の加藤が欠席をしておりますので、オブザーバーとして参加させていただいておりますが、全体ということで簡単に感想的な形になろうかと思いますけれども、私どももやはり今後、札幌は都市部ではありますけれども、やがて人口減少という問題、それから、非常に高い高齢化率が課題となってきてございますし、やはり産業的な自立をどうしていくかということ、こういった中で、札幌として北海道もあわせてどういう特色を出していけるかということを非常に悩んでおりまして、今日、皆様方からのご意見を拝聴いたしまして、非常に参考になった部分がございます。

特に、都市、札幌の場合は非常にオープンなことということで、特性としてやはり集客、交流ということを大きな柱にしていきたいと思っていまして、都市で持つ魅力の中で、それから周辺の自然環境、それから食といいますか、北海道の持った特色を、札幌だけではなく、ほかの自治体さんも含めた形での特色をどう生かして、それを外に出していけるか。特色を、我々自体が、きちっと認識しているのかということと、改めてそれをうまく外に伝え切れているのか。これは国内も国外も含めてなんですけれども、先ほど部会長さんからもお話がありましたように、オーストラリアの方が北海道のよさを説明してオーストラリアからのいろいろな観光につなげているというようなことがありまして、要するにグローバル化の中で外の人の知恵をかりながら、北海道、札幌の持っている特色をどう表現して組み立てて行くのかということが非常に重要なことで、そこにはやはり、まさにオープンな気質の中での交流という中でそれを生み出していければと考えてございまして、こういった今の今後の議論を私どもとしても非常に参考とさせていただきながら進めていきたいと思っております。

【南山部会長】　　ありがとうございました。

長時間いろいろとほんとうに貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。

時間が残念ながら来ましたので、この資料４－１、資料４－２についての議論は、これで一応は終了したいと思っています。ただ、今後とも皆さんから御意見をいろいろな側面でいただいて次のステップに進みたいと思います。

そういう意味からも、中間のとりまとめにつきまして、各委員から意見の提出をお願いしたいということで、前回も申し上げましたが、ちょっと具体性に欠けるところがありま

したので、今回、少し具体的に、こういう形で、こういう内容について、ということを御説明させていただきたいと思います。事務局から説明をお願いします。

【鈴木参事官】　資料５「中間とりまとめに向けた各委員の意見のとりまとめについて」という資料に基づいて説明させていただきます。

これまでの基本政策部会でいろいろ意見を、部会運営に当たっての意見をいただいたところですけれども、このうち、各委員から意見の提出を求めることについては、次のように対応したいと考えています。

「中間とりまとめに向けた各委員からの意見のとりまとめについて」ということで、第４回、今日の基本政策部会までの議論をもとに、時代の潮流の変化と北海道開発の意義、６期計画の点検、新たな計画の在り方などについて、意見をいただきたいということであります。

締め切りですけれども、４月１７日、月曜日、様式・分量自由とし、いただいた意見については次回の部会において提出させていただきたいと思います。

１番目が「時代の潮流の変化と北海道開発の意義について」。今日まさに議論いただいた部分、資料４－１について、ここで「記述内容の妥当性」と書くのは恥ずかしいような気がしますけれども、この内容について今日いただいた意見のほかに、追加的にまだ意見等がありましたら、提出をお願いしたいと思います。この部分は、特に今日欠席した委員の皆様にもぜひいただきたいものですから、あえてこれも入れております。

それから２点目、「６期計画の点検について」。これは、第３回の基本政策部会の資料の中に「第６期北海道総合開発計画の全体評価の視点・論点」、「６期計画の主要施策の点検」という資料がありますけれども、そういった資料について新たな計画の在り方の議論につながる課題を抽出するという観点から、記述内容、追加すべき事項などについて意見の提出をお願いしたいと思います。

それから、特に点検の充実を図るという意味で、一番最後のページに委員のお名前と、特にこの部分について御意見をいただきたいという部分について記入しております。一番最後のページを見ていただきますと、「６期計画の点検について」の部分、それから後で説明しますが、「新たな計画の在り方について」の部分で、ここに名前を入れさせていただいた委員の皆様につきましては、こういったテーマについても言及いただきたいということで、関連あるようなテーマ等を選んでおりますけれども、そのようにさせていただきたいと考えております。

また１枚目に戻りまして、３）「新たな計画の在り方について」。今日の資料４－２の部分です。「時代の潮流の変化と新たな計画の在り方の視点・論点」について、記述内容の妥当性、さらなる議論を要する事項、今後の部会での検討に当たり特に必要と考えられる事項について幅広い意見の提出をお願いします。ここにつきましても、最後のページにありますように議論の偏りを防ぐために一部の委員におかれましては全般への意見に加えまして、そこに記載させていただいた事項についても意見をいただきたいと考えております。

提出方法等についてはそこに書いてあるとおりですけれども、いろいろ問い合わせ等ありましたらどんどんしていただいて、もし必要であれば、また説明なり、資料の送付なりもさせていただきたいと思っております。

いろいろ御議論いただいたところですけれども、さらに意見の提出についてもよろしくお願いしたいと考えております。

一番最後のページの委員のお名前につきましては、専門分野ということで指定させていただいております。あとは関連部分ということなので、全員が網羅されているわけではなくて、特に全般について見ていただきたいというような委員の方と、それから、特にこの部分にということで名前を挙げさせていただいている部分があります。というようなことであります。特に専門を限定できなかったという部分なんですけれども。

【南山部会長】　要するに、いろいろ御意見いただきたいけれども、しかじかの先生にはぜひこの件はお忘れなくということですね。

【鈴木参事官】　はい、そういうことです。よろしくお願いいたします。

【南山部会長】　ありがとうございました。

今の件につきまして、何かご質問、あるいは御意見がもしあればお伺いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

【川島委員】　質問なんですけれども、私はお題が与えられたところに入っているんですけれども、これを入れて、あとは何を言ってもいいと、そういうことなんでしょうか。

【南山部会長】　そうなんですね。これはぜひ御意見いただきたいということと、それから、ここに名前を挙げた方については、ぜひこの件はお忘れなく必ずお願いしたいというような意味です。

【鈴木参事官】　そういう意味です。

【川島委員】　わかりました。

【南山部会長】　ということですが。

【家田委員】　資料４－１について、あるいは資料４－２も関係していたと思うんですけれども、今日の部分については、もう私は十分言いましたので、いいとして、この点検のほうをやるという。今日の部分については、例えば資料４－１にいろいろな先生方から出た意見を右側に例えば手書きでいいから書いて、Ａ３か何かにして郵送でもしておいてくれるといいですけれどもね。書き直す必要はないので、出た意見が横についていればいいと思うんですけれどもね。

【鈴木参事官】　できるだけ早く整理しまして送らせていただきたいと思います。

【南山部会長】　よろしいでしょうか。

それでは、時間でありますので、今日の部会については以上で終了したいと思います。

連絡事項はありますか。

【岡田総務課長】　次回の部会につきましては、現在、調整中でございますので、決まり次第、できるだけ早くお知らせしたいと思います。札幌での開催を予定しておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

それから、資料につきましては、お手元に置いていただければ郵送もさせていただきますので、よろしくお願いしたいと思います。

以上です。

【南山部会長】　それでは、第４回の基本政策部会をこれで閉会といたしたいと思います。

今日は大変ご熱心にご議論いただいてありがとうございました。

【鈴木参事官】　どうもありがとうございました。

―― 了 ――